

# 三 口 遺 跡 5 次 調 査

大分県中津市大字相原における店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

三 口 遺 跡  
5 次 調 査

大分県中津市大字相原における店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

中津市教育委員会



## 序

大分県の最北部に位置する中津市は、国指定名勝耶馬溪など緑豊かな自然や城下町の香りを色濃く残す、自然と文化の町として知られています。また、近年は自動車関連会社などの進出・稼働により工業の町としての新たな側面も見せ始めています。

一方、経済活動の発展・促進に付随した開発事業は、埋蔵文化財へ影響を与えることがあります。平成29年度はこうした開発事業にともなう試掘・確認調査が、東九州道などへのアクセス道路整備、インター周辺の開発及び市街地周辺の宅地化などにより、前年度に引き続き増加傾向にあります。埋蔵文化財を取り巻く環境は厳しいところではありますが、文化財は現代に生きる我々が責任をもって未来へ伝えていかなくてはなりません。

本書はこうした開発の中で、中津市大字相原における店舗建設に先立ち、中津市教育委員会が実施した三口遺跡5次調査の発掘調査報告書です。調査により弥生時代から古墳時代の集落や墓地に関連する施設が確認され、特に弥生時代の甕棺墓や石棺墓は当地域の歴史を考えるうえで貴重な資料となりました。

本書が歴史教育や学術研究資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護やその理解への一助となりましたら幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力を賜りました株式会社コスモス薬品様をはじめ関係各位、及び調査に従事して下さった方々に対し、深甚から感謝申し上げます。

平成30年3月31日

中津市教育委員会  
教育長 廣畑 功

# 例 言

- 1 本書は、店舗建設工事に伴い、大分県中津市大字相原で平成29年度に実施した、三口遺跡5次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成29年6月16日に株式会社コスモス薬品と中津市が埋蔵文化財発掘調査の委託契約を結び、同日から中津市教育委員会が実施した。
- 3 本書に掲載した遺構の略称は、竪穴住居跡が「住」、柱穴列が「柱」、石棺墓が「石」、甕棺墓が「甕」、土坑が「土」、集石遺構が「集」、溝状遺構が「溝」、ピットが「P」と表記した。
- 4 遺構の実測図作成は、調査担当者の末永弥義のほか、衛藤美紀・中坂真基子・村上由美子が行った。また、遺構の写真は末永が撮影した。なお、遺跡全景の空中写真については中津市消防局の協力を得て、動画の撮影を行うことができた。
- 5 出土遺物の整理作業は、岩男純子・岩崎弘子・久原彩・土橋厚子が担当した。
- 6 遺物の実測・トレース・写真撮影は末永が行った。
- 7 本書で使用した座標は、世界測地系による。
- 8 本書に掲載した三口遺跡周辺主要遺跡分布図は、国土地理院発行の1/50,000「中津」・「宇佐」を改変したものである。
- 9 今回の調査で出土した遺物及び検出した遺構の図面・写真等の記録は、中津市歴史民俗資料館に保管している。
- 10 本書の執筆・編集は末永が行った。

## 本文目次

第1章 調査の経過と組織 .....	1
第1節 調査の経過 .....	1
第2節 調査の組織 .....	1
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境 .....	2
第1節 地理的環境 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	2
第3章 調査の内容 .....	5
1 竪穴住居跡 .....	5
2 柱穴列 .....	11
3 埋葬施設 .....	12
4 土坑 .....	16
5 集石遺構 .....	20
6 その他の遺構 .....	22
第4章 調査のまとめ .....	33

## 挿 図 目 次

第1図	三口遺跡周辺主要遺跡分布図 (縮尺 1/50,000)	3
第2図	三口遺跡5次調査位置図 (縮尺 1/4,000)	4
第3図	三口遺跡5次調査全体図 (縮尺 1/250)	6
第4図	竪穴住居跡実測図1 (縮尺 1/60)	7
第5図	竪穴住居跡出土遺物実測図1 (縮尺 1/2・1/3・1/4)	8
第6図	竪穴住居跡実測図2 (縮尺 1/60)	10
第7図	竪穴住居跡出土遺物実測図2 (縮尺 1/4)	11
第8図	柱穴列実測図 (縮尺 1/60)	12
第9図	1号石棺墓実測図 (縮尺 1/30)	13
第10図	1号甕棺墓実測図 (縮尺 1/30)	14
第11図	埋葬施設出土遺物実測図 (縮尺 1/2・1/4・1/8)	15
第12図	土坑実測図 (縮尺 1/40)	17
第13図	土坑出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	19
第14図	集石遺構実測図 (縮尺 1/30)	20
第15図	集石遺構出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	21
第16図	その他の遺構出土遺物実測図 (縮尺 1/3・1/4)	23
第17図	クロボク層出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	25
第18図	クロボク層及び確認調査出土遺物実測図 (縮尺 1/2・1/3・1/4)	26

## 表 目 次

第1表	出土土器観察表	28
第2表	出土土製品・石製品等観察表	32

## 図 版 目 次

図版1	(1)三口遺跡5次調査前全景 (南から) (2)A区全景 (北から)
図版2	(1)A区北半 (南から) (2)B区全景 (西から) (3)C区全景 (南から)
図版3	(1)1号竪穴住居跡 (東から) (2)2号・3号・5号竪穴住居跡付近 (北東から) (3)2号・3号竪穴住居跡 (西から) (4)2号竪穴住居跡遺物出土状況
図版4	(1)4号・5号竪穴住居跡 (東から) (2)5号竪穴住居跡 (北西から) (3)6号竪穴住居跡・1号石棺墓 (東から)
図版5	(1)1号・2号柱穴列 (西から) (2)1号・2号柱穴列・3号土坑 (東から) (3)2号柱穴列 (北西から) (4)1号柱穴列P2・2号柱穴列P1

- |       |  |   |
|-------|--|---|
| 図版 6  | (1) 1号石棺墓蓋石(南から)<br>(3) 1号石棺墓棺内清掃後(南から)<br>(5) 1号石棺墓棺内(真上から)<br>(7) 1号石棺墓北側壁(南から)                      | (2) 1号石棺墓蓋石開放状況(南から)<br>(4) 1号石棺墓棺内清掃後(東から)<br>(6) 1号石棺墓刀子出土状況(北から)<br>(8) 1号石棺墓西側小口(東から) |
| 図版 7  | (1) 1号甕棺墓蓋石検出(北西から)<br>(3) 1号甕棺墓墓壇半裁(真上から)<br>(5) 1号甕棺墓蓋石開放(北東から)<br>(7) 1号甕棺墓完掘後(北東から)<br>(9) 同墓壇掘削痕跡 | (2) 1号甕棺墓蓋石検出(北東から)<br>(4) 1号甕棺墓墓壇断割り(南西から)<br>(6) 1号甕棺墓口縁部(南西から)<br>(8) 同墓壇堆積物           |
| 図版 8  | (1) 1号土坑(東から)<br>(3) 5号土坑(北から)<br>(5) 7号土坑・5号溝(南から)  | (2) 2号土坑付近(南東から)<br>(4) 6号土坑(南から)   |
| 図版 9  | (1) 1号集石遺構(西から)<br>(3) 1号集石遺構遺物出土状況(東から)<br>(5) 2号集石遺構(北西から)   | (2) 1号集石遺構(東から)<br>(4) 2号集石遺構(北西から)   |
| 図版 10 | (1) 1号溝状遺構(東から)<br>(3) 3号・4号溝状遺構(北西から)<br>(5) 16号ピット   | (2) 1号・2号溝状遺構(北西から)<br>(4) 3号・4号溝状遺構(南西から)  |
| 図版 11 | (1) 1号住居跡出土遺物 1<br>(3) 1号住居跡出土遺物 3<br>(5) 4号住居跡出土遺物<br>(7) 1号石棺墓出土遺物 1                                 | (2) 1号住居跡出土遺物 2<br>(4) 3号住居跡出土遺物<br>(6) 4号・5号住居跡出土遺物<br>(8) 1号石棺墓出土遺物                     |
| 図版 12 | (1) 1号甕棺 (2) 1号甕棺口縁部   | (3) 1号甕棺体部下半  |
| 図版 13 | (1) 1号甕棺墓出土遺物<br>(3) 3号土坑出土遺物 1<br>(5) 3号土坑出土遺物 3<br>(7) 7号土坑出土遺物                                      | (2) 1号・2号土坑出土遺物<br>(4) 3号土坑出土遺物 2<br>(6) 5号～7号土坑出土遺物                                      |
| 図版 14 | (1) 1号集石遺構出土遺物 1<br>(3) 1号集石遺構出土遺物 3<br>(5) ピット等出土遺物 1<br>(7) クロボク層出土遺物 1                              | (2) 1号集石遺構出土遺物 2<br>(4) 1号集石遺構出土遺物 4<br>(6) ピット等出土遺物 2<br>(8) クロボク層出土遺物 2                 |
| 図版 15 | (1) クロボク層出土遺物 3<br>(3) クロボク層出土遺物 5<br>(5) クロボク層出土遺物 7<br>(7) クロボク層出土遺物 9                               | (2) クロボク層出土遺物 4<br>(4) クロボク層出土遺物 6<br>(6) クロボク層出土遺物 8<br>(8) クロボク層出土遺物 10                 |
| 図版 16 | (1) クロボク層出土遺物 11<br>(3) 1号住居跡・34号ピット出土遺物<br>(5) クロボク層出土遺物 13   | (2) 1号住居跡・1号甕棺墓出土遺物<br>(4) クロボク層出土遺物 12   |

# 第1章 調査の経過と組織

## 第1節 調査の経過

三口遺跡は沖代平野の南部で、山国川東岸の段丘上に立地する弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。この遺跡内の中津市大字相原3303番地他で平成28年3月10日に埋蔵文化財包蔵地の照会が提出された。事業対象地の現況は畑地で、照会があった事業は店舗建設を実施するもので、建物建築部分は掘削工事を伴うものであった。このため、中津市教育委員会は文化財保護法第93条第1項の届出が必要である旨の指導を行った。届出は平成29年1月13日に提出され、6月5日に確認調査を実施した。調査の結果、集石遺構や溝が確認され、表土層下のクロボク層には多量の弥生土器等が含まれることが判明した。このため、教育委員会は工事主体者と遺跡の記録保存についての協議を行い、6月16日付で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。発掘調査及び報告書作成業務の履行期間は平成29年6月21日から平成30年3月31日までとした。

現地における発掘調査は6月21日に開始し、設定した調査区は建物建築部分（A区212㎡・B区190㎡）と浄化施設設置部分（C区6㎡）で、調査面積は合計408㎡である。調査ではまず基盤層の上に堆積する耕作土・クロボク土等を深さ1.0m前後にわたって掘削し、その後人力によって遺構の検出・掘削を行った。現地における調査は8月10日に終了した。その後、出土品の整理作業を経て報告書作成作業を実施した。

## 第2節 調査の組織

今回の三口遺跡5次発掘調査に伴う事業執行の組織は次のとおりである。

調査主体 中津市教育委員会

教育長	廣畑 功
調査事務 社会教育課長	高尾 良香
社会教育課文化財室長	高崎 章子
社会教育課管理・文化振興係主幹	大森 健・磯貝 奏
社会教育課管理・文化振興係係員	湊 恵・陽 麻里奈・渡邊奈津子
社会教育課文化財係主幹	花崎 徹
社会教育課文化財係副主任研究員	浦井 直幸
社会教育課文化財係	丸山 利枝
社会教育課文化財係主事	衛藤 美紀
調査担当 社会教育課文化財係嘱託	末永 弥義

また、現地における発掘調査に従事した作業員は次のとおりである。

今木 功一・加来 晴美・金崎ミチ子・後藤 哲・清水 洋子・祐成 本文・田中 政恵・

中上 好孝・中坂真基子・松本 和彦・宮津しのぶ・村尾 繁樹・村山上由美子

なお、調査中の7月29日には現地説明会を実施し、約80名の参加者があった。また、8月1日には中津市消防局の協力を得て、動画による空中写真撮影を行った。



## 第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

大分県中津市は県の北部に位置し、面積は491km<sup>2</sup>に及ぶ。四至は北方が瀬戸内海西端の周防灘に開け、西が福岡県に、東が宇佐市に、南は玖珠町と日田市に接している。市の西部を北流する一級河川山国川は英彦山（標高約1,200m）を源とし、下流域では福岡県との県境をなすとともに広い沖積平野「沖代平野」を形成する。上中流域は山稜が複雑に延び、その中央部を占める国指定の名勝耶馬溪は沿岸約50kmに展開する。耶馬溪は頼山陽の命名によるもので、一帯は耶馬日田英彦山国定公園の一部となっている。また、市の東部には犬丸川が北東に流れるが、沖代平野と犬丸川の間には標高10m～30m程度の洪積台地「下毛原台地」が広がっている。

### 第2節 歴史的環境

市内には旧石器時代以降の遺跡が数多く分布し、その一部は発掘調査されている（第1図参照）。

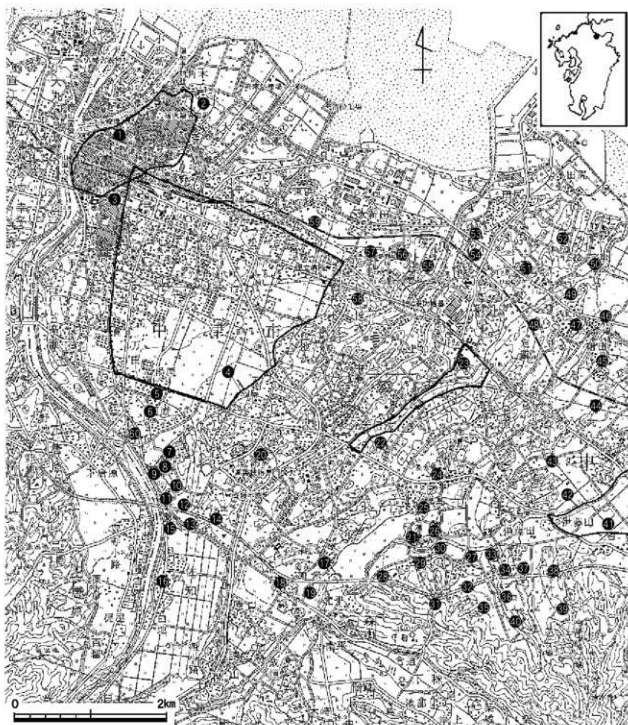
**旧石器時代** 旧石器時代の遺跡はまだ少ないが、諸田南遺跡（44）で尖頭器やナイフ形石器が出土している他に、才木遺跡（35）・法垣遺跡（19）などでも石器が出土している。

**縄文時代** 縄文時代になると、上畑成遺跡（43）で早期の無文土器が出土し、早期末から前期の黒水遺跡（18）では陥し穴が発見されている。後期・晩期に属する植野貝塚では牙製垂飾具・貝輪などの装身具や魚類・動物の骨などが出土し、高畑遺跡では土偶も発見されている。集落跡では古田遺跡が調査されているが、法垣遺跡は竪穴住居跡以外にも掘立柱建物跡が検出された重要な遺跡である。

**弥生時代** 弥生時代になると山国川や犬丸川流域の沖積平野で水稲耕作が拡大していったと考えられる。前期後葉から中期初頭の上ノ原平原遺跡（13）や諸田遺跡（45）で貯蔵穴が発掘されている。中期では福島遺跡（25）で住居跡とともに二列埋葬の土壙墓群が確認されている。また、森山遺跡（28）では前期末から後期初頭の集落全域が把握されている。

**古墳時代** 古墳時代では集落や生産遺跡・墳墓などの各種の遺跡が確認されている。集落関係では後期に属する中須遺跡・十前垣遺跡・諸田遺跡・定留遺跡（47）などが調査されている。これらのうち十前垣遺跡では移動式カマドが出土し、諸田遺跡ではL字カマドを有する住居跡や籾の羽口が発見され、渡来人の系譜に属する人々の存在が推測されている。須恵器を生産した城山窯跡群（36）や草場窯跡（37）・桶ヶ迫窯跡（38）・ホヤ池窯跡（39）・大谷窯跡（40）などからなる野依伊藤田窯跡群は犬丸川中流の丘陵地帯に位置し、一部は奈良時代まで継続している。古墳では下毛原台地北部の亀山古墳（58）以外の多くの墳墓は台地の南西部に営まれている。5世紀中ごろには山国川に面する助助野地遺跡（12）で方形周溝墓が築造され、5世紀後半から7世紀前半には上ノ原横穴墓群（11）が造営される。また、三保地域には後期になると岩井崎横穴墓群（29）・城山古墳群（34）・城山横穴墓群（33）などが築造される。7世紀から9世紀の相原山首遺跡（7）では方墳が作られている。

**白鳳～平安時代** 7世紀末の白鳳期に創建された相原廃寺（6）は沖代平野の南端部に位置するが、その北方約500mを隔てて西北西～東南東方向に官道「勅使街道」が整備される。沖代地区糸里跡（4）はこの官道を南限として8世紀初頭には沖代平野の広範囲に施行されている。古代の下毛郡衙



- |              |              |             |             |              |
|--------------|--------------|-------------|-------------|--------------|
| 1. 中津城       | 13. 上ノ原平原道跡  | 25. 福島道跡    | 37. 草場竈跡    | 49. 和間貝塚     |
| 2. 中津城下町道跡   | 14. 大池南道跡    | 26. 福島地下式横穴 | 38. 睡ヶ道竈跡   | 50. 定留鬼塚道跡   |
| 3. 豊田小学校校庭道跡 | 15. 佐知久保畑道跡  | 27. 前田道跡    | 39. ホヤ池竈跡   | 51. 是徳道跡     |
| 4. 沖代地区条里跡   | 16. 佐知道跡     | 28. 森山道跡    | 40. 大谷竈跡    | 52. 田尻大迫道跡   |
| 5. 市場道跡      | 17. 加来居屋敷道跡  | 29. 岩井崎横穴墓群 | 41. 野依道跡    | 53. 舞手橋東段上道跡 |
| 6. 相原廃寺      | 18. 黒水道跡     | 30. 犬丸川流域道跡 | 42. 野依地区条里跡 | 54. 是間道跡     |
| 7. 相原山首道跡    | 19. 法垣道跡     | 31. 洞ノ上竈跡   | 43. 上畑成道跡   | 55. 全徳道跡     |
| 8. 鶴市神社裏山古墳  | 20. 長者屋敷官衙道跡 | 32. 安平道跡    | 44. 諸田南道跡   | 56. ガラマノ道跡   |
| 9. 坂手隈横穴墓群   | 21. ボウガキ道跡   | 33. 城山横穴墓群  | 45. 諸田道跡    | 57. 合馬道跡     |
| 10. 弊願邸古墳    | 22. 大悟法地区条里跡 | 34. 城山古墳群   | 46. 天貝川道跡   | 58. 亀山古墳     |
| 11. 上ノ原横穴墓群  | 23. 原道跡      | 35. 才木道跡    | 47. 定留道跡    | 59. 東浜道跡     |
| 12. 勘野野地道跡   | 24. 田丸城跡     | 36. 城山竈跡群   | 48. 定留貝塚    | 60. 三口道跡     |

第1図 三口遺跡周辺主要遺跡分布図 (縮尺1/50,000)

の正倉跡である長者屋敷官衙遺跡(20)も8世紀後半に官道の南側に建設されている。集落では三口遺跡(60)で10世紀代の緑釉陶器や墨書土器が出土している。

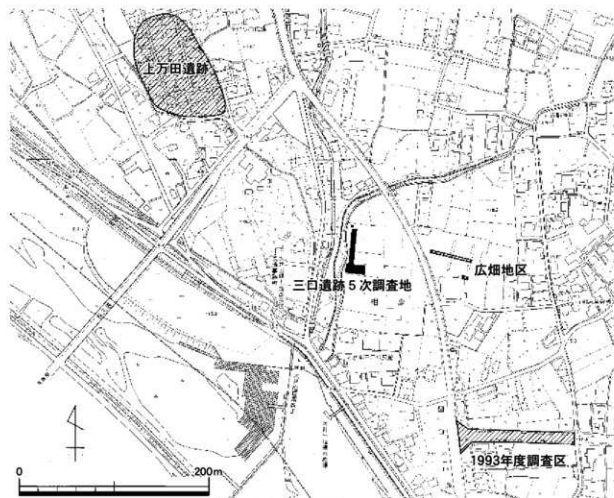
**中世** 中世の遺跡としては植野古城遺跡・諸田遺跡・中尾城跡・犬丸城跡などがあるが、諸田遺跡では堀に囲まれた居館跡が調査され、中尾城跡では土塁が現存する。犬丸城跡は犬丸氏の居城で、黒田官兵衛の豊前入国に従わず一揆に加わり、黒田氏に攻め落とされる。16世紀末には黒田氏が入封して中津城(1)が築造されるが、石垣に高度な構築技法が採用された九州最古の近世城郭とされている。

**近世以降** 1600年関ヶ原の合戦の後、黒田氏に替わり細川氏が入部し、城と城下町(2)が整備・拡張される。城下の造営は小笠原氏が入部する1632年に完成し、1717年には奥平氏が入部する。

### 三口遺跡5次調査地の周辺遺跡

今回調査地の周辺ではこれまで何度か発掘調査が実施されている(第2図参照)。

北西約200mの上万田遺跡では昭和45年の宅地造成の際に緊急調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代にかけての堅穴住居跡や甕棺墓・石棺墓などが確認された。また、東方約100mでの駐車場建設に先立つ三口遺跡広畑地区の調査では、土坑や溝状遺構を検出し、9世紀前後の土器を出土した。南東約200mの1993年度調査区では6世紀から8世紀代の堅穴住居跡7軒・掘立柱建物跡8棟が調査され、墨書土器が出土している。さらに先述した相原廃寺が東方400mに立地する。



第2図 三口遺跡5次調査位置図(縮尺1/4,000)

## 第3章 調査の内容

三口遺跡は沖代平野の南端部に位置し、南東から北西方向に流れる山国川の東岸の河岸段丘上に立地している。今回の調査対象地はこの河岸段丘直上の畑地として利用されている土地で、標高は17m前後である。

今回調査地の基本的な層位は耕作土（暗黄灰色砂質土）が40cm前後、その下位にクロボク層（黒色弱粘質土）が70cm前後厚く堆積し、その下層が基盤層（明黄灰色弱粘質土）となる。遺構の検出は本来ならばクロボク層の上面で行うべきところであるが、この土層は土色が遺構検出に不適であったことから、基盤層上面を遺構検出面とした。このためクロボク層中に掘り込まれた遺構の一部は、残念ながら調査によって破壊されたものと考えられる。

調査区の設定は、事前の確認調査に基づき建物の建築場所のうち、遺構が比較的密に存在し、建物の基礎が地表下の深い位置（1.0m）まで達する部分を中心とすることとなった。この結果、調査区は調査対象地の西部に南北長さ42.5m・東西幅5.0mのA区を設定し、その南端に東西長さ20.0m・南北幅9.5mのB区を直角に配置した。またA区の北方3.7mの浄化槽設置予定地に東西長さ2.75m・南北幅2.0mのC区を設けた。（第3図参照）

遺構はA区の中央部から北部に各種のものが集中して分布し、B区では土坑や集石遺構などが散在する。今回の調査で検出した主な遺構は、竪穴住居跡6軒・柱穴列2条・石棺墓1基・甕棺墓1基・土坑7基・集石遺構2基・溝状遺構5条などである。

### 1 竪穴住居跡

竪穴住居跡はA区の北部から中央部にかけて6軒確認した。ただし、遺構の検出をクロボク層下の基盤層で実施したため、クロボク層中から掘り込んだ竪穴の壁面が検出できなかった住居跡も多い。住居跡の床面の平面形は柱穴の配置も考慮に入れて、円形と考えられるものが2軒、方形と推定されるものが4軒である。

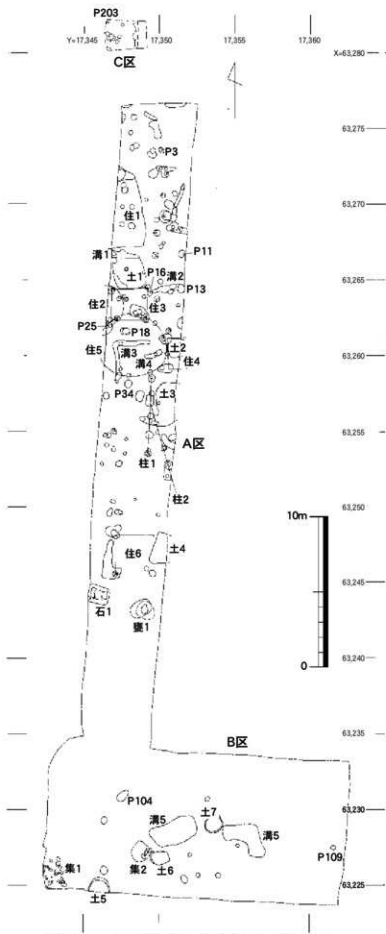
#### 1号竪穴住居跡（第4図）

1号竪穴住居跡はA区の北部に位置し、東半分しか調査していないが、西半分は調査区外まで続いている。遺構検出面の標高は約16.0mである。

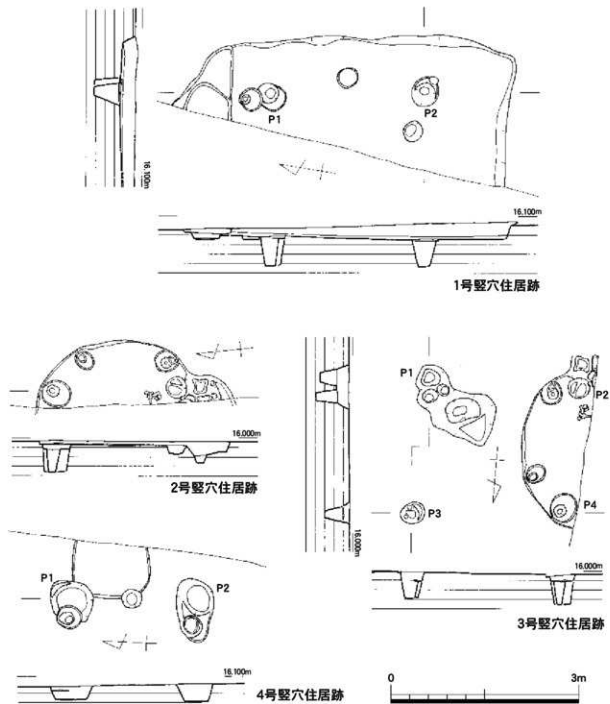
遺構の壁面は北辺が他の遺構に切られて不明であるが、東辺と南辺はほぼ直角になることから、床面は全体として方形の平面形をなすと考えられる。遺構の規模は南北が約4.95mで、東西は2.3m分検出されたが、本来は南北の長さと同程度と推定される。床面はほぼ水平で、遺構検出面からの深さは最深部で0.29mである。主柱穴は本来4本が方形に配置されていたと考えられるが、検出したのは北東部のP1と南東部のP2の2本だけである。主柱穴P1とP2の間隔は芯々で2.45mである。P1は長径48cm・短径41cmのやや楕円形の平面形を呈する。柱痕跡は上部で径30cm、下部で16cmで、深さは床面から47cmをはかる。P2は長径50cm・短径41cmの楕円形の平面形で、柱痕跡は下部で長径16cm、床面からの深さは40cmである。床面の主軸の方位はP1・P2を基準にする $N-9^{\circ}-W$ である。

遺物は埋土中から弥生土器の甕・壺・高坏・丹塗壺の他に、土師器の甕・坏、須恵器の坏身・坏蓋などの土器類と石包丁・フレイクなどの石器類が出土している（第5図）。

1～6は弥生土器である。1は甕の口縁部の小片で、口縁部が体部からほぼ水平に屈曲し、上端部を上方に小さくつまみ上げる。体部上位には断面三角形の突帯を1条めぐらす。2も甕の口縁部の小片で、口縁部が鋤先状を呈し、直下に断面がM字状の突帯を1条めぐらす。3は甕の底部の破片で、下端部に向かって大きく開く。底部の厚さが非常に厚く、底面がわずかに上げ底である。4は甕の体部上位の小片で、断面台形の突帯を1条めぐらす。5は底部の破片で、器形は壺かと考えられる。底部の器壁はやや薄く、底面がわずかに丸みをもつ。6は高杯の口縁部から坏部中位の小片である。杯部の下位が大きく開き、強く屈曲したのち上位が垂直に近く立ち上がる。口縁端部は丸くおさめている。7・8は須恵器である。7は坏蓋の体部中位から口縁部の小片で、やや低平な器形で、口縁端部が尖り気味である。8は坏身の口縁部から体部上位の小片で、7と同様にやや低平な器形で、口縁部がやや短く内傾しながら立ち上がる。9～13は土師器である。9は甕の口縁部の小片で、口縁端部がわずかに内傾する面をつくり、器面調整は内面がヨコ方向、外面がタテ方向のハケ目である。10は壺の口縁部の小片で、口縁部が端部に向かって外反しながら強く開く。11は坏かと考えられる口縁部から体部



第3図 三口遺跡5次調査全体図 (縮尺1/250)



第4図 竪穴住居跡実測図1 (縮尺1/60)

上位の小片である。口縁端部の器壁がやや薄くなっている。12は甕の体部下位から底部の破片で、底部が丸底気味で、器面調整は内面が細かいヨコハケ、外面がタテハケである。13は高杯の脚部の可能性がある小片で、端部を水平に小さく折り曲げている。

201は石包丁の肩部近くの小片で、外湾刃半月形の平面形と考えられる。背の端部断面が尖り気味で、刃部は両面から研ぎだすが均等ではない。色調が暗赤紫色を呈する。202・203は姫島産黒羅石のフレイクである。202の上面には自然面が残る。

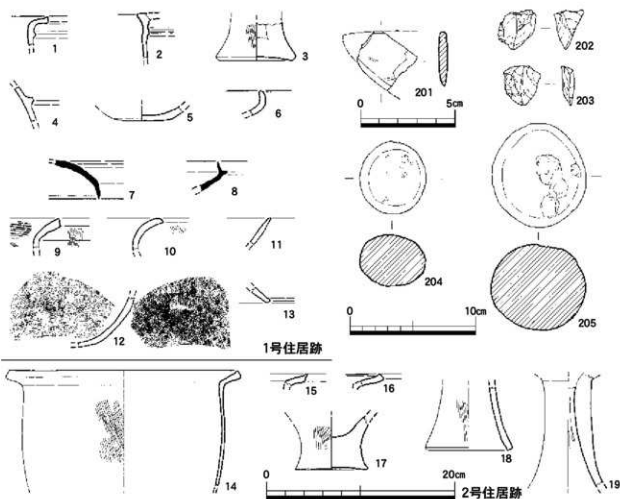
## 2号竪穴住居跡（第4図）

2号竪穴住居跡は1号竪穴住居跡の南側約2.5mに位置し、東部の一部のみしか調査していないが、西側は調査区外まで続いている。遺構検出面の標高は約16.0mである。

遺構の壁面は南東部の一部が内側に入り込むが、全体としては直径3.5m程度の円形を呈すると推定される。床面はほぼ水平で、検出面からの深さは最深部で0.07mとやや浅い。遺構内で検出された5基のピットはすべて他の遺構に属するものと考えられ、当住居跡の主柱穴の配置は不明である。中央部よりやや南側の床面直上から弥生土器が一括して出土している。

遺物は弥生土器の甕・高杯・器台と敲石が出土している（第5図）。

14～19は弥生土器で、このうち14～17は甕である。14は口縁部から体部中位の破片で、口縁部は「く」の字状に屈折したのち水平に近く開き、端部を上方につまみ上げている。体部は張りがなく、器壁が0.3cm程度と非常に薄い。15・16は口縁部の小片で、15は口縁端部を上方に細くつまみ上げ、16も上端をつまみ上げ、外縁の端面が内傾する。17は底部の破片で、底部の器壁が厚く、底面は回転ナデの調整を施してわずかに上げ底にしている。18は器台の体部下半の破片で、中位から底部に向かって鼓形に外反気味に開く。内面の下端にヨコナデを施し、わずかにくぼませている。19は高杯の脚部上半の破片である。上位が円柱状を呈し、中位から下位に向かって器壁を薄くしながらしだいに外反して開く。内面の上位に絞り痕が残る。



第5図 竪穴住居跡出土遺物実測図1（縮尺1/4（1～19）、縮尺1/2（201～203）、縮尺1/3（204・205））

204・205は完形の敲石である。204は平面形がほぼ円形の小型の製品で、断面はやや扁平である。周縁部を中心に上面にも細かい敲打痕が残る。使用後に火中に投棄されたものか、表面が部分的に赤色または黒色に変色している。205は平面形がやや楕円形を呈し、断面は円形に近い。上面の一部に敲打による小さい剥落が見られる。また204と同様に表面の一部が黒色に変色している。

### 3号竪穴住居跡（第4図）

3号竪穴住居跡は1号竪穴住居跡の南側に隣接し、西側が2号竪穴住居跡と切り合っている。遺構検出面の標高は約16.0mである。

当住居跡は壁面が確認できなかったが、主柱穴の配置からみて方形の平面形をなすと考えられる。4本検出した主柱穴はやや平行四辺形に配置されている。それらの間隔は東西間の芯々でP1・P2が2.4m、P3・P4が2.35mで、南北間はP1・P3が2.20m、P2・P4が1.95mである。各柱穴の形状はP1が円形に近い平面形で、径48cm程度、検出面からの深さは48cmである。P2は直径34cmの円形で、深さは19cmと浅い。P3はやや楕円形の平面形で、長径39cm、深さ42cmである。P4もわずかに楕円形の平面形で、長径46cm、深さは45cmで、柱痕跡は直径が上面で17cm、底部で7cmである。主軸の方位はP1・P3を基準にするとN-5°-Wである。

遺物は柱穴内から弥生土器の甕や壺が出土している（第7図）。

20はP1から出土した甕の口縁部から体部上位の小片である。口縁部が体部から「く」の字状に屈折し、口縁端部を上方につまみ上げる。21・23・24はP4から出土し、21が甕の体部上端の小片で、断面三角形の突帯をめぐらす。23は鋤先状を呈する壺の口縁部の小片で、外端部を上方につまみ上げる。24は壺の体部上位の小片で、断面M字状の突帯をめぐらす。22はP2から出土した甕の体部下位の破片である。内面にスズ状の付着物がある。

### 4号竪穴住居跡（第4図）

4号竪穴住居跡はA区の中央部付近に位置し、東側は調査区外まで続いていると推定される。遺構検出面の標高は約16.0mである。

当住居跡の遺構としてはほぼ同規模の柱穴2基が検出されただけである。住居の壁面が残存していないため不確実であるが、床面の平面形は方形ではないかと推定され、他の2本の柱穴が調査区外の東側に配置されていると考えられる。主柱穴P1は平面形が隅丸方形に近く、長径68cmで、深さは20cmである。P2は長径69cmの楕円形の平面形をなし、深さは28cmである。主軸の方位はP1・P2を基準にするとN-3°-Wである。

遺物は柱穴内から弥生土器の甕・壺と須恵器の小片が出土している（第7図）。

25～29はすべて弥生土器である。25はP1から出土した甕の口縁部の小片である。口縁端部はやや丸くおさめている。26～29はP2から出土した甕の底部の破片である。26・28・29は底部の器壁が非常に厚く、底面は26がほぼ平底、28がやや上げ底、29が高い上げ底になっている。27は体部下位から底部の破片で、体部の器壁が薄く、底部はやや厚く、底面は平底である。

### 5号竪穴住居跡（第6図）

5号竪穴住居跡はA区の中央部付近に位置し、西側の一部が調査区外まで続いていると推定される。遺構検出面の標高は約15.9mである。



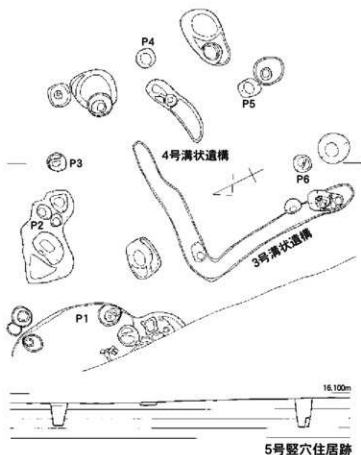
住居跡の壁面は残存しなかったが、やや楕円形に配置される6本の柱穴が確認された。これらの柱穴で囲まれた空間の大きさは東西の長径が約4.7m、南北の短径が4.2mである。柱穴の間隔は芯々で最も広いP3・P4間が2.2m、最も狭いP2・P3間が約1.35mである。各柱穴の形態はP1が直径36cmの円形で、深さが44cm、柱痕跡の上部が直径18cmである。P2は他の遺構と切り合っているため形態は不明である。P3は平面形が直径30cmの円形で、深さは37cmである。P4も平面形が円形で、直径32cm、深さは47cmである。P5は隅丸方形の平面形で、長径34cm、深さは39cmである。P6は平面形が直径30cmの円形で、深さは46cmである。なお、これらの柱穴の配置から推測して、調査区外にも2本程度の柱穴が存在し、全体としては主柱穴は8本程度になると考えられる。

遺物は各柱穴から弥生土器の甕・壺と丹塗土器の小片が出土している(第7図)。

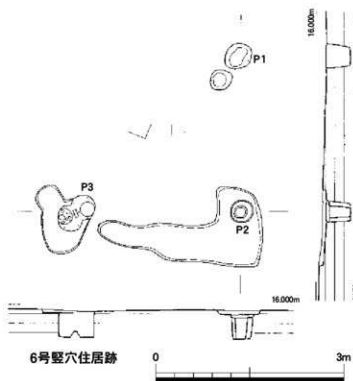
30・31はP2から出土した甕である。30は口縁部から体部上位の小片で、口縁部が体部から「く」の字状に屈折したのちやや短く外上方に延びる。体部上位に断面三角形の突帯を1条めぐらす。31は口縁部で、端部が器壁をやや厚くしながら、上部を上方にわずかにつまみ上げる。

#### 6号竪穴住居跡 (第6図)

6号竪穴住居跡はA区の南部に位置する。遺構検出面の標高は約15.9mである。

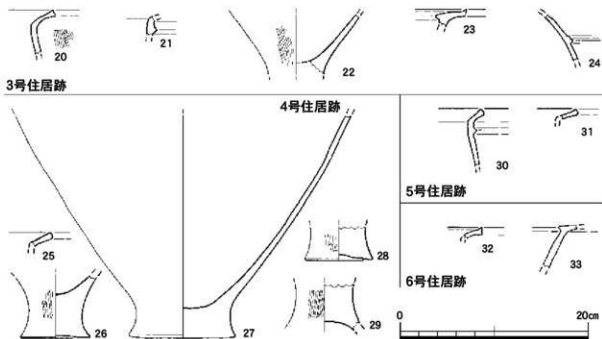


5号竪穴住居跡



6号竪穴住居跡

第6図 竪穴住居跡実測図2 (縮尺1/60)



第7図 竪穴住居跡出土遺物実測図2 (縮尺1/4)

当住居跡でも壁面は確認することができず、直角に配置されたP1～P3の3本の柱穴を検出しただけである。それらの柱穴の間隔は東西方向のP1・P2が2.5m、南北方向のP2・P3が2.45mである。各柱穴の形態はP1が長径47cmのやや楕円形で、深さは40cmである。P2は直径36cmの円形の平面形で、深さは48cm、検出された柱痕跡の直径は上部で20cmである。P3は他の柱穴と切り合うが、直径38cmのほぼ円形の平面形で、深さは43cmである。これらの柱穴の配置から考えてP1の北側にもう1本の柱穴が存在したと推定されるが検出できなかった。なお、P2からL字形に屈折してP3に向かって直線的に延びる幅0.6m前後の浅い溝状遺構を検出したが、当住居跡に伴う遺構かどうか不明である。主軸の方位はP2・P3を基準にするとN-1°-Wである。

遺物は柱穴内から弥生土器の甕と壺が出土している(第7図)。

32・33はP3から出土した弥生土器である。32は外反気味で水平に近く開く甕の口縁部の小片で、端部を上方につまみ上げ、外縁部はナデてくぼませる。33は壺の口縁部から頸部の小片である。口縁部が鋤先状を呈し、頸部は直線的に外上方に立ち上がる。

## 2 柱穴列

A区中央部で2条が確認された。地面に直接杭を打ち込む工法ではなく、掘方の中に柱を立てる工法によって施工した遺構であることから、ここでは柱穴列と分類する。

### 1号柱穴列(第8図)

1号柱穴列はA区の中央部のやや東寄り、南北方向に主軸をとる柱穴列である。遺構検出面の標高は約15.9mである。

当柱穴列は5本の柱穴からなり、各柱穴に北側からP1～P5の番号を付している。全長は5.04mで、各柱穴の間隔は1.26mのほぼ等間隔である。各柱穴の形態はP1が長径51cmのやや楕円形の平面形で、深さが36cm、柱痕跡の上部が直径18cmである。P2は他の柱穴と切り合うが、長径45cmの隅丸方形の平面形で、深さは36cmである。P3も隅丸方形に近く、長径40cm、深さ39cmである。

P 4 は長径55cmのやや楕円形の平面形で、深さ36cmである。P 5 も楕円形に近い平面形で、長径46cm、深さ24cmで、柱痕跡の上部が直径24cmである。P 2 ～ P 5 の底部には柱の根固めのために、10cm前後の円礫が置かれている。主軸の方位はN-3°-Eである。なお、東側の調査区外に当柱穴列と並行する柱穴列が存在する可能性があり、その場合当遺構は掘立柱建物跡となる。

遺物はP 1 から縄文土器の浅鉢かと考えられる土器と、P 3 から弥生土器の甕が出土している(第16図)。

96は縄文土器の浅鉢の可能性のある小片の土器である。体部は中位に向かって大きく開き、中で屈折して直立し、口縁部に向かって外反気味に開く器形である。内外面ともヨコ方向のヘラミガキを施す。

## 2号柱穴列(第8図)

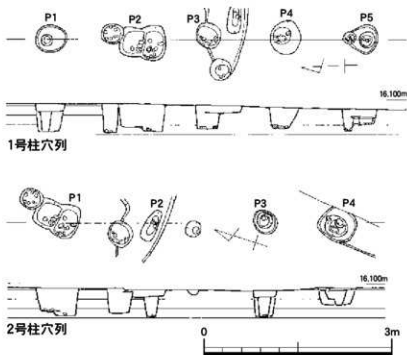
2号柱穴列はA区の中央部のやや東寄り、北西-南東方向に主軸をとる柱穴列で、一部の柱穴が1号柱穴列と切り合っている。遺構検出面の標高は約16.0mである。

当柱穴列は4本の柱穴からなり、各柱穴に北側からP 1～P 4の番号を付している。全長は4.35mで、各柱穴の間隔はP 1・P 2が1.41m、P 2・P 3が1.70m、P 3・P 4が1.24mとやや不揃いである。各柱穴の形態はP 2以外はやや楕円形に近いが、P 2は溝状に近い平面形をなす。大きさはP 1が長径57cm・深さ43cmで、P 2が長さ52cm・幅22cm・深さ42cmである。P 3は長径41cm・深さ40cmで、柱痕跡の上部は直径25cmである。P 4は長径58cm・深さ29cmで、柱痕跡の上部が直径37cmである。各柱穴の底部には1号柱穴列と同様に根固めの円礫が置かれている。主軸の方位はN-18°-Wである。なお、P 1が1号柱穴列のP 2と切り合っているが、先後関係は不明である。

遺物はP 2から弥生土器の甕の一部かと考えられる破片が出土しているが、小片のため図示していない。

## 3 埋葬施設

今回の調査で確認した埋葬施設はA区南部の石棺墓1基・甕棺墓1基である。この2基が集団墓地の一部を構成するものであれば、調査区外にも他の埋葬施設が展開すると考えられる。

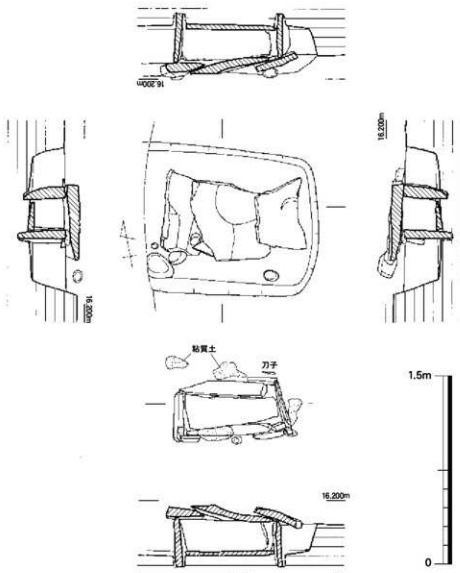


第8図 柱穴列実測図(縮尺1/60)

### 1号石棺墓（第9図）

1号石棺墓はA区の南部に位置し、西端部が調査区外まで続いている。遺構検出面の標高は約16.2mである。

1号石棺墓の基本的な構造は、墓壇の中央に棺を配置し、棺は蓋・側壁・底部のすべての面に板石を使用するものである。墓壇は平面形が長方形であるが、隅がわずかに丸みをもつ。規模は遺構検出面で、長さが調査した部分で138cmであるが、調査区外の部分を考慮すると150cm程度になると推定される。幅は検出面で118cm、底部で100cmであり、横断面の形状が逆台形に近い。墓壇内の南辺に近い部分からいくつかの円礫が出土した。



第9図 1号石棺墓実測図 (縮尺1/30)

石棺の内法の大きさは、床面の長さが75cmで、幅は西端で30cm、東端で23cm、高さは27cmである。床面の幅からみて西側が頭位方向と考えられる。蓋石は基本的に3枚の板状の石材からなり、西側と中央の石材の隙間に小板石が1枚補填されている。3枚の蓋石は西側から順番に重ねていて、重ねる際の重複の幅は西側と中央が約10cm、中央と東側が約15cmである。各蓋石の形態は西側が長さ63cm・幅33cm・厚さ7cmのほぼ長方形で、中央が長さ62cm・幅64cm・厚さ7cmでやや平行四辺形に近く、東側が長さ57cm・幅39cm・厚さ6cmの台形の平面形である。蓋石の隙間や側壁の間には部分的に灰褐色弱粘質土が目張りとして詰められている。側壁は南北両側とも基本的に1枚の大型の板状の石材を立てて使用している。ただし、南側壁は東端に小板石を1枚追加して並べ、さらにその外側と西側の小口との間に1枚ずつの小板石を立て並べている。また、北側壁も東側小口との間の外側に小板石を1枚立てて隙間をふさいでいる。側壁の石材の大きさは北側が長さ68cm・高さ33cm・厚さ10cm、南側が長さ70cm・高さ39cm・厚さ8cmである。小口は板状の石材を基本的に側壁をささむように立てている。石材の大きさは西側が長さ39cm・高さ40cm・厚さ6cm、東側が45cm・高さ38cm・厚さ5cmである。これらの側壁と小口の石材は墓壇の床面に溝状の掘り込み

をし、その中に立てている。床面は1枚の大型の板状石材を敷いている。大きさは長さが73cmで、幅が西端で27cm、東端で16cm、厚さは4cmと薄い。この石棺に使用した石材は、南側壁の大型の1枚が風化が進んだ花崗岩で、これ以外はすべて安山岩系である。また、棺内には全面に赤色顔料が塗布されていた。棺の主軸の方位はN-79°-Wである。

遺物は棺外に鉄製刀子が副葬されていた他、墓壇内や棺内から弥生土器の甕や器種不明土器が出土している(第11図)。

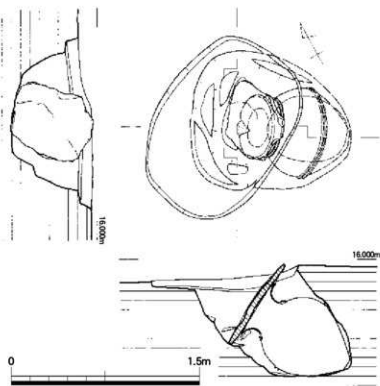
34は墓壇内から出土した甕の体部上位から口縁部の小片で、口縁部が体部から「く」の字状に外反し、端部を上方に小さくつまみ上げている。35は棺内から出土した甕の口縁部の小片である。34と同様に口縁端部を上方に小さくつまみ上げている。36は墓壇内から出土した器種不明の土器で、片側がふさがった円筒形の形態をなす。取手か脚の部分と考えられる。206は完形の刀子で、棺外の北側の東端部(足側側)に刃部を東側に向けて、棺の主軸に並行するように置かれていた。全体に錆が進行しているが、刃部は直線で、先端が切出し状を呈し、茎部の先端が尖っている。大きさは全長11.0cmで、刃部が長さ6.5cm・幅1.1cm・厚さ0.2cmで、茎部は長方形の断面形で最大幅0.7cm・厚さ0.4cmである。

#### 1号甕棺墓(第10図)

1号甕棺墓は1号石棺墓の東方1.5mに隣接し、遺構の検出面の標高は約15.9mである。

1号甕棺墓の基本的な構造は、墓壇を斜め方向に掘り下げ、その内部に板状の石材で蓋をした大型の壺形土器を単棺で使用するものである。墓壇は二段掘りになっていて、上段は棺を埋納するための作業面として使用されたと推測される。平面形が隅丸方形で、遺構検出面の規模は長さ144cm・幅104cm・深さ7cm前後である。下段は棺の埋設部位で、やや長い紡錘形に近い形態をなし、上段のやや北東寄りから掘り込まれている。規模は上段床面の入り口部分が長径109cm・短径84cmで、長さは136cmである。床面はやや楕円形の平面形を呈し、やや凹凸がある。規模は長径63cm・短径52cmで、遺構検出面からの深さは87cmである。なお、床面には0.1~0.3cm程度の厚さで暗茶色の粘質土が堆積していた。これは植物質の敷物かと考えられるが、棺内から流出した屍体の脂質等の可能性もある。墓壇下段の上位から中位には狭いテラス状の平坦面がいくつか付設されている。

棺の蓋石には安山岩系の石材を板石に加工して使用し、棺の口縁を塞ぐように斜めに立てかけてい

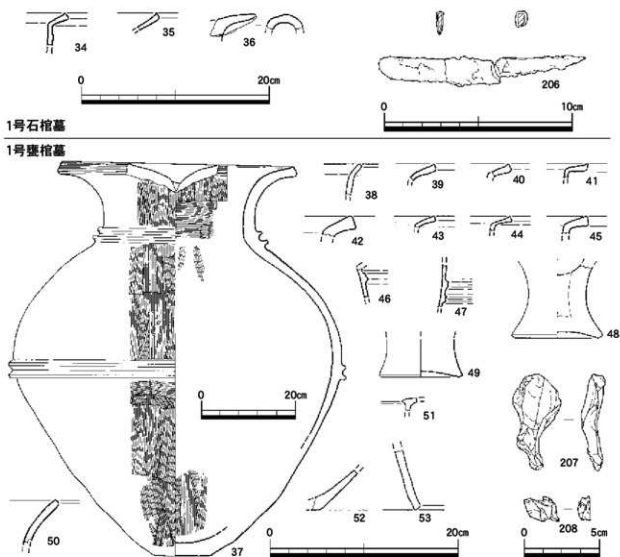


第10図 1号甕棺墓実測図(縮尺1/30)

る。平面形はほぼ長方形で、大きさは長さ77cm・幅54cm・厚さ5cmである。全面に赤色顔料が塗布されている。蓋と棺の口縁の間には明黄灰色の弱粘質土が目張りされている。棺はやや長胴の壺形土器で、高さ83.2cmであり、墓壇床面方向の口縁部の一部を打ち欠き、体部やや下位の同じ方向に小さい孔を穿っている。棺の埋納角度は水平に対して31°で、棺の底部が墓壇の奥まで押し込まれ、棺の体部やや下位で墓壇の床面に接している。1号甕棺墓の主軸の方位は、棺を基準にするとN-55°-Wである。

遺物は墓壇内から弥生土器の甕・壺・器台と姫島産黒曜石のフレイクが出土している（第11図）。

37は棺として使用された壺である。底部がわずかに丸みをもつがほぼ平底である。体部は最大径部がやや上位にあり、この部分に断面台形の高い突帯を2条めぐらす。また、体部と頸部の境にも同様の突帯を2条めぐらしている。頸部は直立したのち外反しながら開き、口縁部ではほぼ水平になる。口縁端部は4条の浅い凹線をめぐらし、端部は全体的には内傾する。上端部は上方につまみ上げている。口縁部の一か所を長さ19.4cmにわたってV字状に打ち欠き、その直下の体部やや下位には長さ1.1cm・幅0.4cmの縦長の孔を外面から穿っている。器面調整は体部の外面がタテ方向のハケ目、内面もタテ方向のハケ目で、中位から上位はナデで消している。頸部は外面がタテハケ、内



第11図 埋葬施設出土遺物実測図（縮尺1/4（34～36・38～53）、縮尺1/8（37）、縮尺1/2（206～208））

面がヨコハケで、口縁部は内外面ともヨコナデである。体部の突帯の上面には一部にハケ目が残っていることから、器面調整は突帯を貼り付けて器形が完成後にハケ目調整を施したと考えられる。また、内外面とも全面に赤色顔料を施すが、口縁部の欠損面にも赤色顔料の塗布がみられる。埋葬後、現在に至るまでの土圧でやや変形しているが、法量は器高83.2cm・口縁部径50.8cm・底部径12.4cm・体部最大径71.6cmで、頸部内側の最も狭くなっている部分は直径26.9cmである。器壁の厚さは、頸部で2.4cm、体部上位が1.8cm、底部は2.8cmである。胎土に角閃石を多く含む特徴は、当地域の弥生土器に共通するものである。38～53は墓壇内から出土した弥生土器で、38～49は甕である。38は口縁部から体部上位の小片で、口縁部の屈曲が弱い。39～41と43・44は口縁部の小片で器壁がやや薄く、端部を上方につまみ上げている。42・44は器壁が厚く、特に端部を肥厚させている。46は体部上位の小片で、断面三角形の突帯をめぐらしている。47は体部中位付近の小片で、断面M字状の突帯を2条めぐらし、外面には丹塗りを施す。48・49は底部の破片で、底面がやや上げ底で、器壁が非常に厚い。51は壺の口縁部と考えられ、鋤先状を呈する。52は壺の底部の小片である。53は器台の体部下位から底部の小片である。

207・208は姫島産黒羅石のフレイクであるが、207は下端部が細くなっていて石錐の可能性がある。

#### 4 土坑

土坑はA区中央部とB区に集中し、遺構番号を付したものが7基である。

##### 1号土坑 (第12図)

1号土坑はA区のやや北部に位置し、北辺が1号溝に切られている。遺構検出面の標高は約15.9mである。

遺構の平面形は隅丸方形を呈し、北辺が1号に切られて不明であるが、規模は遺構検出面で長さ約2.3m・幅2.08mで、深さは最深度で0.18mである。壁面の立ち上がりは垂直に近く、床面はほぼ水平である。中央部付近に円形小ビットが1基あり、南西部隅部の床面が壁面に沿って浅く溝状にくぼんでいる。主軸の方位はN-13°-Wである。

遺物は埋土中から弥生土器の甕と壺が出土している (第13図)。

54～56は甕の口縁部の小片である。54は口縁部が体部から「く」の字状に屈折し、端部を上方に弱くつまみ上げる。55は口縁部が水平に近く開く器形で、全面に丹塗りが施されている。56は口縁部が如意状に短く外反し、内面にはヘラミガキを施す。

##### 2号土坑 (第12図)

2号土坑はA区中央部付近の調査区東壁にかかる位置にあり、東側は調査区外まで続いている。遺構検出面の標高は約16.0mである。

遺構は北西と南西の隅部が別のビットで切られているが、基本的な平面形は方形である。遺構の規模は幅が1.24m、長さは調査した部分で0.88m、深さは0.07mと浅い。床面は水平である。主軸の方位はN-2°-Wである。

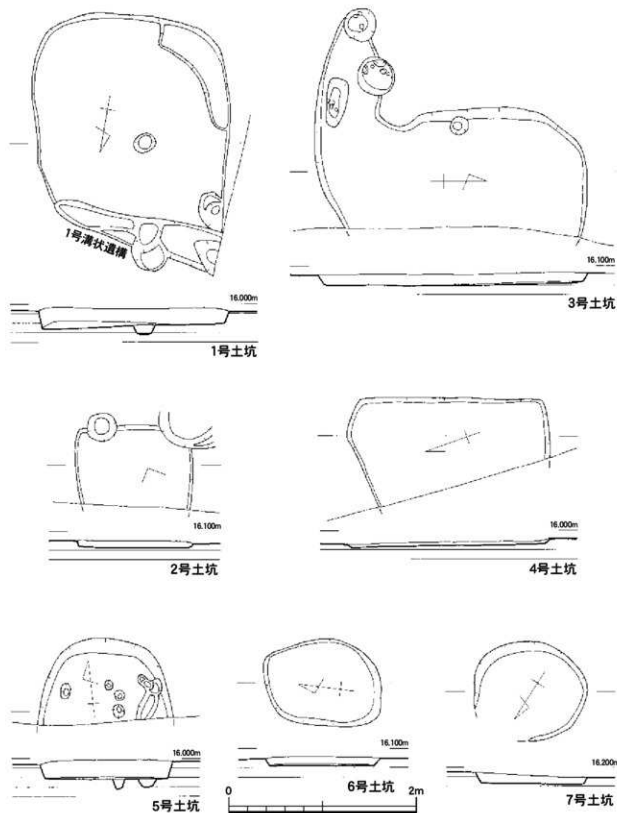
遺物は埋土中から弥生土器の甕と高杯が出土している (第13図)。

57は高杯の杯部上半の破片で、体部の下位から中位までは大きく開き、上位は強く屈曲したのち垂直に近く立ち上がる。口縁端部の内側をわずかに厚くしている。

### 3号土坑 (第12図)

3号土坑はA区中央部の東壁際に位置する土坑で、東側が調査区外まで続いている。遺構検出面の標高は約16.0mである。

遺構の基本的な平面形は隅丸方形であるが、南西隅部から溝状の突出部が西側にのびている。



第12図 土坑実測図 (縮尺1/40)



構の規模は南北の長さが2.87mで、幅は調査範囲内で1.38mである。床面は水平で、深さは最深部で0.12mである。主軸の方位はN-4°-Wである。

遺物は弥生土器の甕・壺・高杯・器台などが出土している（第13図）。

58は図上で完形に復元できる甕で、器高は約22.5cmとやや小型である。口縁部は体部からゆるやかに屈曲して水平に近く開き、体部は上位にやや張りがあり、器壁は薄い。底部は底面がわずかに上げ底で、器壁が厚い。59～63は甕の口縁部の小片である。口縁部の形状が、59は端部を小さく上方につまみ上げ、60は内面をやや肥厚させる。61は端部を上方に高くつまみ上げ、62・63は端部が直線的に開く。64・65は甕の底部の破片で、底面がともにやや上げ底である。65は器壁が非常に厚い。66は器台の体部中位から下位の破片で、下端に向かってしだいに強く外反していく。67・68は壺の底部の破片で、わずかに上げ底を呈する。68の外面の器面調整はヘラミガキである。69は口縁部径約34cmをはかるやや大型の壺の頸部から口縁部の破片で、口縁部が鋤先状を呈し、内側端部の張り出しが特に強い。

#### 4号土坑（第12図）

4号土坑はA区やや南部の東壁際に位置する土坑で、東側が調査区外まで続いている。遺構検出面の標高は約15.9mである。

遺構の平面形は東辺を基準にして、南辺は直交するが、北辺は斜交することから、台形に近い形態かと考えられる。遺構の規模は南北の長さが2.14mで、東西の幅は調査範囲内で1.15mである。床面は平坦であるが、北側が南側に比べて0.04mほど低くなっている。主軸の方位はN-20°-Eである。

遺物は出土していない。

#### 5号土坑（第12図）

5号土坑はB区西側の南壁際に位置する土坑で、南側が調査区外まで続いている。遺構検出面の標高は約16.0mである。

遺構の平面形は楕円形ないし隅丸方形を呈する。遺構の規模は幅が1.43mで、長さは調査範囲内で0.90mである。壁面はやや斜め開きながら立ち上がり、床面は水平で、深さは0.21mである。床面からは円形及び短い溝状の小ビットが検出された。主軸の方位はN-6°-Eである。

遺物は弥生土器の甕が出土している（第13図）。

70は甕の底部の破片で、底面が回転ナデ調整で、わずかに上げ底を呈し、器壁が非常に厚い。

#### 6号土坑（第12図）

6号土坑はB区の中央部よりやや西側に位置する土坑である。遺構検出面の標高は約16.0mである。

遺構の平面形は隅丸方形に近く、規模は長さ1.21m・幅0.92mである。壁面は斜めに開きながら立ち上がり、床面は水平で、深さは0.08mである。主軸の方位はN-6°-Wである。

遺物は弥生土器の壺と土師器の甕が出土している（第13図）。

71は土師器の甕の体部上位から口縁部の破片である。体部の張りがやや弱く、口縁部は弱く屈曲したのち外反しながら立ち上がる。72は弥生土器の壺の頸部上位から口縁部の破片で、口縁部が鋤先状を呈する。内外面ともに丹塗りを施す。

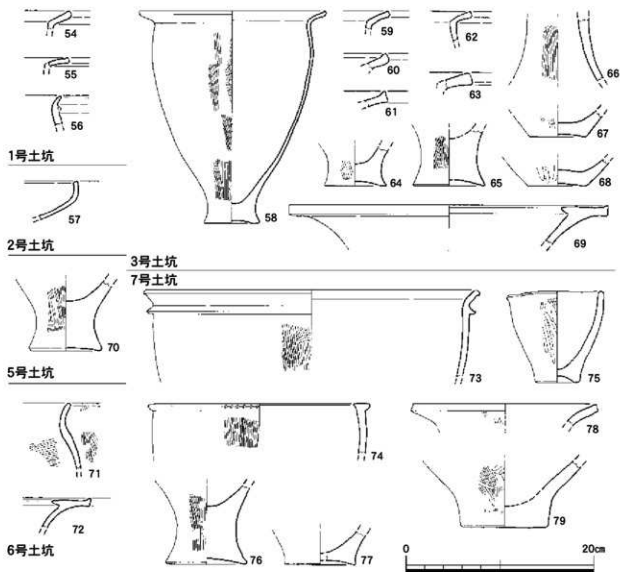
## 7号土坑 (第12図)

7号土坑はB区の中央部に位置する土坑で、5号溝が陸橋状に途切れた部分に所在する。遺構検出面の標高は約16.1mである。

遺構の平面形は楕円形で、規模は長径1.20m・短径1.06mである。壁面は斜めに開きながら立ち上がり、床面は水平で、深さは0.08mである。主軸の方位はN-57°-Eである。

遺物は弥生土器の甕・壺とミニチュア土器が出土している(第13図)。

73は口縁部径35.8cmをはかるやや大型の甕の体部上位から口縁部の破片で、体部に張りが無い。体部と口縁部の境に断面三角形に近い形態の突帯を1条めぐらし、口縁部は体部から「く」の字状にやや短く外反する。74も甕の体部上位から口縁部の破片で、体部の張りが小さい。口縁部は体部上端の外面を肥厚させ、上面がほぼ水平になり、内側を内方につまみだす。口縁部外面には刻み目を施す。75はミニチュア土器の甕のほぼ完形品である。全体的に手づくねの成形で、口縁部は体部から連続して直立する。底部は底面が上げ底で、器壁が薄い。体部外面の器面調整は上位にタテハケが残るが、他の部分はタテ方向のヘラミガキである。76は甕の底部の破片で、外面が下位に向



第13図 土坑出土遺物実測図 (縮尺1/4)

かって強く張り出す。底面はやや上げ底で、器壁が非常に厚い。77は甕かと考えられる底部の破片である。上げ底気味で器壁が薄い。78は壺の口縁部の破片である。頸部が口縁部に向かって大きく開き、口縁端部の外側面をくぼませる。79は壺の底部の破片で、底面が平底で、体部下位にはタテハケのちへラミガキの器面調整を施している。

## 5 集石遺構

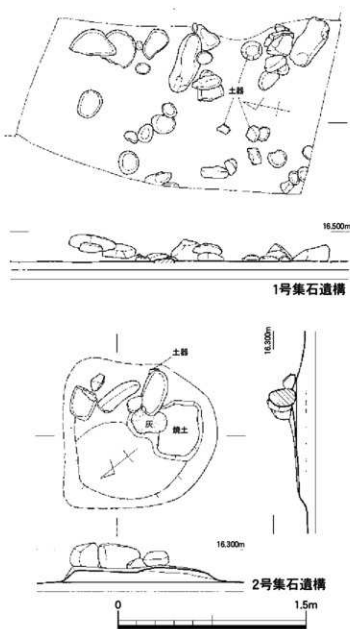
今回の調査で集石遺構と表示したものは土坑等の穴を伴わずに、遺構検出面で平面的に石が集中する状況が確認された遺構である。このため、この種の遺構は本来の遺構の一部を切り取ったものと考えられ、全容が正しく認識されれば他の種類の遺構と認定されるべきものである。今回把握された集石遺構はB区の2基である。

### 1号集石遺構 (第14図)

1号集石遺構はB区の南西隅で確認された遺構で、他の遺構に比べてやや浅いクロボク層中で検出された。南側と西側は調査区外まで続いていると考えられる。遺構検出面の標高は約16.3mである。

遺構は調査区の壁面から東側に約1.0mの位置で南北方向に並ぶ傾向がある円礫群と、この円礫群の内側で調査区壁面との間に散在する小円礫とからなる。東側の円礫群中に2個の柱状の石材が含まれ、これらは長さ40cm～50cmをはかる。他の石材は20～40cmの大きさである。柱状の石材2個は0.68mの間隔をあけて長軸を東西方向にして寝かせている。内側の円礫は径10～20cmの小さいものである。遺物はこれらの石材の間から弥生土器とともに土師器や須恵器が出土しているが、2個の柱状の石材の間からはほぼ完形品の須恵器の坏身(第15図91)が出土している。この遺構の性格については速断できないが、石材の配置や遺物の出土状況などから、古墳の石室の可能性が考えられる。その場合2個の柱状の石材は羨道や玄門などの両側壁の一部で、先の坏身の出土部位が通路部分と考えられる。この想定による主軸の方位はN-76°-Eである。

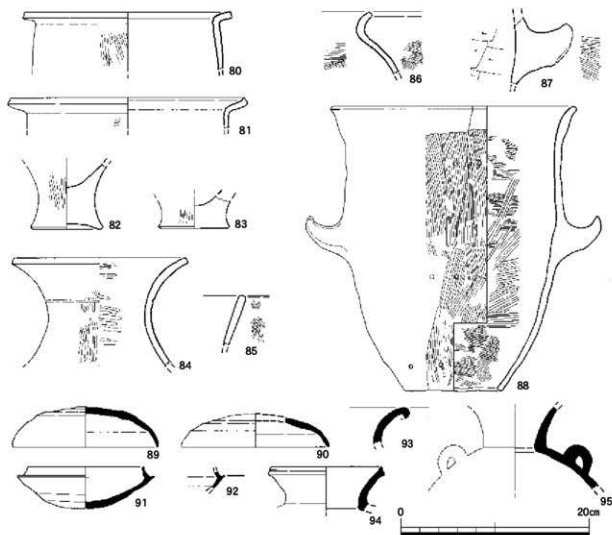
当遺構から出土した遺物には弥生土器



第14図 集石遺構実測図 (縮尺1/30)

の甕・壺・器台、土師器の壺・甕、須恵器の坏身・坏蓋・壺・提瓶などがある（第15図）。

80～85は弥生土器である。80・81は甕の体部上位から口縁部の破片で、口縁部が80は屈曲したのちやや短く開き、81は口縁端部を上方につまみ上げる。82・83は甕の底部の破片で、82は底面がやや上げ底で器壁が非常に厚く、83は底面が平底である。84は壺の口縁部から頸部の破片で、頸部の中位が最も細くなり、口縁部に向かって弧を描いて外反しながら開く。頸部の上位に沈線を1条めぐらす。器面調整は外面がタテ方向、内面がヨコ方向のヘラミガキである。85は器台の口縁部から体部上位の小片である。86～88は土師器である。86は壺の口縁部から体部上位の小片で、体部が球形に近くなると考えられ、口縁部は外反しながら外上方に開く。87は甕の取手部分で、内面にはヨコ方向のヘラケズリを施す。88は完形に近い甕である。口縁部は外面をやや肥厚させ、外上方にゆるやかに外反して立ち上がる。体部は張りがなく、取手は体部の中位付近に付き、外上方に延びたのち細くなりながら上方に立ち上がる。底部は下位に向かって径が小さくなりながら筒状を呈する。この個体は口縁部から底部にかけて縦方向に破断しているが、この破断線をはさんで体部の上位・中位・下位の3か所の両側に径0.4cm前後の円孔が穿たれている。この孔は破損した個体をひも状のもので緊縛して補修するために施されたものと考えられる。89～95は須恵器である。89・90は坏蓋で、89の体部外面は上半のみ回転ヘラケズリの調整が残り、口縁部は垂直に下がり、



第15図 集石遺構出土遺物実測図（縮尺1/4）

端部は尖り気味である。89は器高がやや低く、口縁部は外下方にのびる。91・92は坏身で、91はほぼ完形品である。口縁部が外反しながら短く内傾し、体部は下位から上位に向かって直線的に開く。92は体部上位から口縁部の小片で、蓋の受け部がほぼ水平に開く。93・94は壺かと考えられる口縁部の破片である。93は口縁部が外反しながら開き、端部を下方に折り曲げる。94は口縁部が外上方に直線的に開き、端部の外側面は内傾して中央部に1条の細い沈線をめぐらす。95は提瓶の体部上位から頸部の破片である。頸部が上位に向かって外反気味に開き、体部上端部付近に半環状の突起をもつ。

## 2号集石遺構（第14図）

2号集石遺構はB区の中央よりやや西側に位置する。遺構検出面の標高は約16.3mである。

この遺構は5個の円礫と、その周囲の灰・焼土面とからなる。礫はほぼ南北方向に一列に並び、全長0.80mで、長い石材は寝かせるように据えている。礫の大きさは最大のもので長さ36cmである。これらの円礫群の南西に接して灰と焼土の層が分布し、焼土層は幅48cm・厚さ3cm前後である。円礫群の北西側はやくぼんでいるが、本来このくぼみをはさんで反対側に同様の石列が設けられていて、カマドとなっていたと推測される。この遺構の主軸の方位はN-39°-Wである。

遺物は土師器の甕が出土しているが、小片のため図示していない。

## 6 その他の遺構

その他の遺構としては溝状遺構とピットがある。溝状遺構として番号を付したものはA区に4条、B区に1条の合計5条である。

### 1号溝状遺構（第12図-1号土坑実測図参照）

1号溝状遺構はA区の北部に位置し、1号土坑を切り、西側は調査区外まで続いている。遺構検出面の標高は15.9mである。

当遺構はほぼ東西方向に直線的に延び、検出した全長は1.81mである。遺構の幅は検出面で0.24m～0.45m、深さは最も深い部分で0.17mである。断面の形状は逆台形を呈する。主軸の方位はN-84°-Wである。

遺物は弥生土器の甕が出土している（第16図）。

98は甕の体部上位から口縁部の破片である。口縁部が体部からほぼ直角に屈折し、体部上位には断面台形の突帯をめぐらす。

### 2号溝状遺構

2号溝状遺構はA区の北部に位置し、他の3基のピットに切られ、東側は調査区外まで続いている。遺構検出面の標高は約16.0mである。

当遺構はほぼ東西方向に直線的に延び、検出した全長は2.18mである。遺構の幅は西端部が細く0.22m、東側は0.38m前後である。深さは0.08mと浅い。主軸の方位はN-84°-Eである。

遺物は弥生土器の甕と壺が出土している（第16図）。

97は甕の体部上位から口縁部の破片である。口縁部が如意状に弱く外反し、端部に小さい刻み目を施す。体部の張りはなく、上位に1条の沈線をめぐらす。

### 3号溝状遺構（第6図-5号竪穴住居跡実測図参照）

3号竪穴住居跡はA区の中央よりやや北側に位置し、3基のビットに切られている。遺構検出面の標高は約16.0mである。

当遺構は東西方向に直線的に伸び、西端からは南方へほぼ直角に屈折して直線的に続いている。長さは東西部分が2.52m、南北部分が2.76mである。幅は東西・南北とも0.30m程度である。深さは全体的に浅く、東西部分で0.05m、南北部分で0.03mである。方位は東西部分が $N-87^{\circ}-E$ で、南北部分は $N-3^{\circ}-W$ である。

遺物は弥生土器の器種不明の小片が出土している。

### 4号溝状遺構（第6図-5号竪穴住居跡実測図参照）

4号溝状遺構は3号溝状遺構の東側に隣接する。遺構検出面の標高は約16.0mである。

遺構はほぼ東西方向に伸びるが、全長は1.23mと短い。幅は0.30m前後で、深さは北端部が一段深くなっていて0.18mである。主軸の方位は $N-71^{\circ}-W$ である。

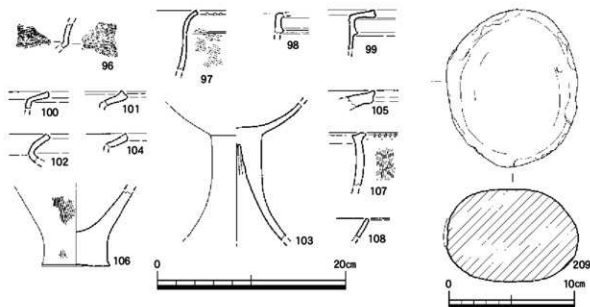
遺物は弥生土器の甕が出土している（第16図）。

99は甕の口縁部から体部上位の小片である。口縁部が体部から直角に屈折して水平に開き、端部の器壁をやや厚くしている。口縁部の外面（下面）には長さ1cm程度の線刻が約2cm間隔で施されている。体部は張りがなく、上位に断面三角形の突帯をめぐらす。

### 5号溝状遺構

5号溝状遺構はB区の中央部付近に位置する。遺構検出面の標高は約16.1mである。

当遺構は途中が陸橋状に途切れて北側と南側とに分かれるが、東西方向の全長は7.3mをはかる。北側の部分は中央部でほぼ直角に屈折して、L字状の平面形を呈する。長さは東西方向が2.24m、南北方向が2.38mで、幅は1.1m前後である。深さは最深部で0.08mである。北側と南側の間の陸橋状の部分は長さ1.7mである。南側の規模は長さ3.16m・幅1.60mで、深さは0.04mと浅い。遺



第16図 その他の遺構出土遺物実測図（縮尺1/4（96～108）、縮尺1/3（209））

構全体の主軸の方位は東西方向の部分を基準とするとN-89°-Eである。

遺物は弥生土器の甕が出土しているが、小片のため図示していない。

## その他のピット

ここではピットからの出土遺物を中心に報告する（第16図）。

3号ピットはA区北部に位置する柱穴状の遺構で、弥生土器の甕と壺が出土している。100は甕の口縁部の小片で、「く」の字状に屈折する口縁の端部を上方につまみ上げる。

11号ピットはA区やや北部に位置する柱穴状の遺構で、弥生土器の甕が出土している。101は甕の口縁部の小片で、端部を上方につまみ上げ、外側面が内傾し、中央をややくぼませる。

13号ピットは2号溝状遺構の東端部を切る柱穴状の遺構で、弥生土器の甕と壺が出土している。102は短頸壺の口縁部の小片で、端部を上方に小さくつまみ上げる。

16号ピットは2号溝状遺構の西側に隣接する柱穴状の遺構で、遺構検出面の直下から弥生土器の高杯が出土している。103は坏部の下位から脚部の中位までの高杯の破片である。杯部が内湾気味に大きく開き、脚部は上位が円筒状をなし、中位から下位に向かってしだいに大きく開く。

18号ピットは3号溝状遺構の北側に隣接する、平面形が隅丸方形を呈する柱穴状の遺構で、弥生土器の甕と壺が出土している。104は甕の口縁部の小片で、端部を上方につまみ上げている。

25号ピットは2号住居跡の南端壁際に位置する柱穴状の遺構で、弥生土器の甕が出土している。105は甕の口縁部の小片で、器壁が厚く、外側面が直立する。

34号ピットは3号溝状遺構の南東に隣接する柱穴状の遺構で、弥生土器の甕と破石が出土している。209は完形の破石で、平面形がやや楕円形を呈し、周縁部に使用痕が残る。

104号ピットはB区の西部で、平面形が楕円形を呈するやや大型の遺構で、弥生土器の甕が出土している。106は甕の底部の破片で、底面がほぼ平底で、器壁が厚い。

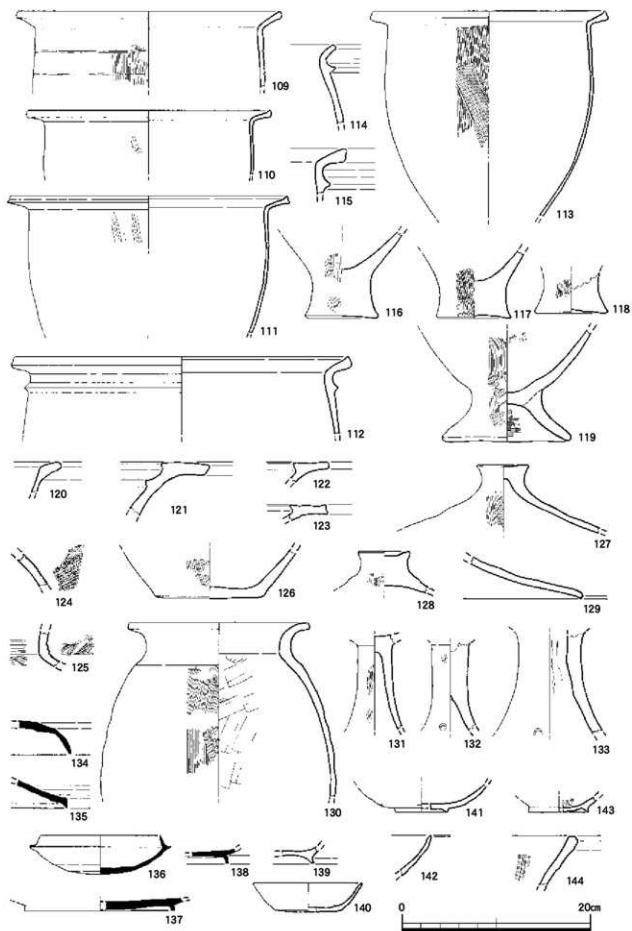
109号ピットはB区の東端部に位置する柱穴状の遺構で、弥生土器の甕が出土している。107は甕の口縁部から体部上位の小片で、口縁端部の外側に突帯をめぐらし端部に刻み目を施す。

203号ピットはC区の北西隅に位置する柱穴状の遺構で、土師器の小片と瓦器の塊が出土している。108は塊の口縁部の小片である。

## クロボク層出土遺物

当遺跡には全体的にクロボク層が厚く堆積し、その層中からは多量の土器や石器等が出土した（第17図・第18図）。

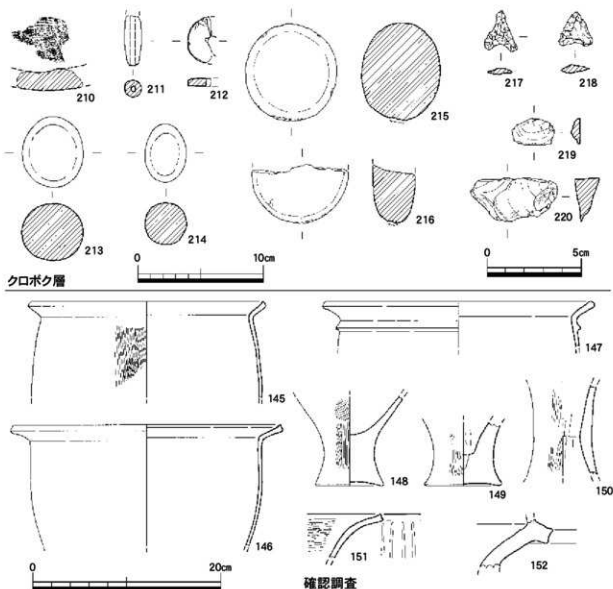
109～129・131～133は弥生土器で、109～119は甕である。109は口縁部から体部上位の破片で、口縁部がく字状に屈曲し、体部上位に2条の細い沈線をやや間隔をあけてめぐらせている。110も口縁部から体部上位の破片で、口縁部が水平に近く外反し、体部の器壁が薄い。111は口縁部から体部中位の破片で、体部の張りが弱く、器壁が薄い。112は口縁部から体部上位のやや大型の器形で、口縁部は肥厚させ、端部を上方につまみ上げる。口縁部直下に断面三角形の突帯をめぐらし、体部はやや張る。113は口縁部から体部下位の破片で、口縁部は端部を肥厚させ、上方につまみ上げる。114は口縁部から体部上位の小片で、口縁部が如意状に外反し、直下に断面三角形の突帯をめぐらす。体部の張りが強い。115は口縁部から体部上位の小片で、口縁部は肥厚させ、直下に断面三角形の突帯をめぐらす。116～118は底部の破片で、すべて底面がわずかに上げ底である。119



第17図 クロボク層出土遺物実測図 (縮尺1/4)



は脚付きの甕の体部下位から脚部の破片で、脚部が大きく外反し、器面調整は外面がタテハケ、内面がヨコハケである。120は鉢の可能性のある口縁部の小片で、口縁部が体部から屈折して水平に近く短く開く。121～126は壺で、121～123は筋先状を呈する口縁部の小片である。121はやや大型の器形と考えられ、口縁部直下の内面に断面三角形の突帯をめぐらす。122・123はともに口縁端部の上面が水平になり、122は丹塗の痕跡が残り、123は外側面をややくぼませる。124は体部上位の小片で、外面に二枚貝により、上部に2条の横線、その下に羽状文かと考えられる文様を施す。125は頸部から体部上位の小片で、頸部と体部の境に低い突帯をめぐらし、その上面にハケ状工具により斜方向に刻み目を施す。126は体部下位から底部の破片で、底面が平底で、体部下位の開きが弱い。127～129は蓋である。127はつまみが上位に向かってしだいに開き、つまみの上面がほぼ平坦である。体部は下位に向かって大きく開く。128はつまみの上面がくぼみ、器壁が厚い。129は体部下位から口縁部の破片で、口縁端部を下方につまみだす。131～133は高杯の脚部上位から中位の破片である。131は上位が円筒状で外面に丹塗を施し、132は円柱状を呈し、中位には円孔を穿つ。133はやや大型の器形で、中位の円孔を穿つ。130は土師器の甕の口縁部から体部中位の破片で



第18図 クロボク層及び確認調査出土遺物実測図 (縮尺1/3 (210～216)、縮尺1/2 (217～220)、縮尺1/4 (145～152))

ある。口縁部が直立したのち強く外反し端部ではほぼ水平になる。体部は長胴気味で、中位の張りが強くない。134～138は須恵器である。134・135は蓋で、134は体部下位で屈曲したのち口縁部に向かって外下方に下がる。135は体部下位から口縁部に向かって直線的に開き、口縁端部を下方につまみだす。136は坏身で、口縁部が内上方に直線的にやや短く立ち上がる。137は皿の底部の破片で、高台の内側端部を内側につまみだす。138は坏の底部の小片で、高台はほぼ直立し、器壁がやや薄い。139は土師器碗の底部の小片で、外下方に開く器壁の薄い高台が付く。140は土師器の坏で、底部が平底、体部は口縁部に向かって直線的に開く。141は瓦器の碗の体部下位から底部の破片で、外面は体部下位までヨコナデや一部にヘラミガキが残る。142も瓦器かと考えられる口縁部から体部中位の小片である。143は土師器碗の底部の小片で、内面にヘラミガキを施す。144は瓦器の罎鉢の口縁部から体部上位の小片で、口縁部の外面をやや肥厚させる。

210は平瓦の小片で、厚さが2.0cm前後、上面に布目痕が残る。211は土鍾で、両端が細くなるが全体としては棒状を呈する。212は用途不明の石製品で、紡錘車の転用品と考えられる。薄い板状で、外縁部が円弧をなす。213～220は石器である。213・214は投弾で、213はやや大型で平面形が楕円形を呈し、重量が156.4gをはかる。244は平面形が紡錘形を呈する。215・216は敲石で、215は球形に近く、216は扁平である。217・218は打製石鏃の完形品で、217は基部の抉りが深く、218は正三角形に近い平面形をなす。219・220は姫島産黒曜石のフレイクである。220の上面には自然面が残る。

#### 確認調査時出土遺物

事前の確認調査の際にも多数の土器が出土しているので、一括して報告する（第18図）。

145～152はすべて弥生土器である。145・146は甕の口縁部から体部中位の破片で、145は体部中位付近にやや張りがある。146は口縁部がくの字状に屈折したのち端部を上方につまみ上げる。147は甕の口縁部から体部上位の破片で、口縁部直下に断面三角形の突帯をめぐらす。148・149は甕の底部の破片で、148は底面がやや上げ底で、器壁が非常に厚い。149は底部に向かってしだいに大きく開き、平底気味である。150は器台の体部中位の破片で、円筒状を呈する。151は壺の口縁部の小片で、外面にタテ方向のヘラミガキを暗文風にほどこす。152は大型の壺の口縁部から頸部の小片で、頸部が大きく外反し、上端部を突帯状に張り出させ、口縁部が屈折して直立するものと考えられる。

第1表 出土土器観察表

出土遺構	押洞番号	遺構 (残存状況)	注量(m)	色調・胎土・焼成			焼成	成形・調整・技法	備考
				①器高 ②口径 ③底径 ④その他	色調 外・外面 内・内面	胎土			
1号住居跡	5-1	弥生土器・壺 口縁部	①(3.3)	外・明褐色 内・明褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ/ヨコナデ 内:ヨコナデ/ヨコナデ		
1号住居跡	5-2	弥生土器・壺 口縁～体部上位	①(4.9)	外・明黄褐色 内・明黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ/ヨコナデ 内:ヨコナデ/ヨコナデ		
1号住居跡	5-3	弥生土器・壺 底部	①(4.1) ③(8.4)	外・明黄褐色 内:—	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外:タテハケ/回転ナデ 内:—		
1号住居跡	5-4	弥生土器・壺 体部上位	①(3.9)	外・にぶい黄褐色 内・暗灰黄色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ?		
1号住居跡	5-5	弥生土器・壺? 底部	①(1.6)	外・にぶい黄褐色 内・暗灰黄色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:不明 内:ヘラズリ?		
1号住居跡	5-6	弥生土器・高环 口縁部	①(2.6)	外・浅黄褐色 内・浅黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ミガキ 内:不明		
1号住居跡	5-7	須恵器・坏蓋 口縁～体部中位	①(4.1)	外・灰色 内・灰色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:回転ヘラズリ/ヨコナデ 内:ヨコナデ		
1号住居跡	5-8	須恵器・坏身 口縁～体部上位	①(3.2)	外・灰色 内・灰色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
1号住居跡	5-9	弥生土器?壺 口縁部	①(3.2)	外・褐色 内・褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外:タテハケ 内:ヨコナデ		
1号住居跡	5-10	弥生土器?壺 口縁部	①(3.4)	外・にぶい黄色 内・にぶい黄色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:タテハケ・ミガキ 内:ミガキ		
1号住居跡	5-11	土師器・坏 口縁部	①(2.9)	外・褐色 内・褐色	1mm以下の石英・長石・ 雲母・褐色砂粒微量	良好	外:不明 内:不明		
1号住居跡	5-12	土師器・壺 底部	①(5.3)	外・浅黄褐色 内・浅黄褐色	1mm以下の石英・長石 微量	非常に 良好	外:タテハケ 内:ヨコハケ		
1号住居跡	5-13	土師器・高环 脚部下位	①(1.7)	外・褐色 内・褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・褐色砂粒微量	良好	外:不明 内:ヘラミガキ		
2号住居跡	5-14	弥生土器・壺 口縁～体部中位	①(12.3) ②(25.0) ④体部径(21.5)	外・にぶい褐色 内・にぶい褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ/タテハケ 内:ヨコナデ/ナデ		
2号住居跡	5-15	弥生土器・壺 口縁部	①(1.3)	外・褐色 内・明黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ? 内:ヨコナデ?		
2号住居跡	5-16	弥生土器・壺 口縁部	①(1.3)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
2号住居跡	5-17	弥生土器・壺 底部	①(5.7) ③7.7	外・褐色 内・明赤褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:タテハケ・ナデ/回転ナデ 内:ナデ?		
2号住居跡	5-18	弥生土器・甕台 体部中位～高环 脚部上位～中位	①(6.7) ③(9.3)	外・にぶい褐色 内・にぶい黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:タテハケ 内:ナデ・ヨコナデ		
2号住居跡	5-19	弥生土器・高环 脚部上位～中位	①(12.1)	外・淡赤褐色 内・明赤褐色	3mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:不明 内:ナデ		
3号住居跡	7-20	弥生土器・壺 口縁部	①(4.7)	外・にぶい黄褐色 内・褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ヨコナデ/タテハケ 内:不明/不明		
3号住居跡	7-21	弥生土器・壺 口縁部	①(2.1)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ナデ?		
3号住居跡	7-22	弥生土器・壺 体部下位	①(6.4)	外・明黄褐色 内・灰黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:タテハケ 内:不明		
3号住居跡	7-23	弥生土器・壺 口縁部	①(2.0)	外・にぶい黄褐色 内・明黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
3号住居跡	7-24	弥生土器・壺 体部上位	①(4.9)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヘラミガキ・ヨコナデ 内:ナデ?		
4号住居跡	7-25	弥生土器・壺 口縁部	①(1.5)	外・灰黄褐色 内・灰黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
4号住居跡	7-26	弥生土器・壺 底部	①(6.7) ③7.4	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:タテハケ・ナデ/回転ナデ 内:不明		
4号住居跡	7-27	弥生土器・壺 体部上位	①(23.5) ③11.4	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	3mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ナデ?/ナデ 内:ナデ?		
4号住居跡	7-28	弥生土器・壺 底部	①(3.5) ③7.2	外・褐色 内:—	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:タテハケ・ナデ/ナデ 内:—		
4号住居跡	7-29	弥生土器・壺 底部	①(5.0)	外・褐色 内:—	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:タテハケ 内:ナデ		
5号住居跡	7-30	弥生土器・壺 口縁～体部上位	①(6.1)	外・褐色 内・褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ/タテハケ・ナデ 内:ヨコナデ/ナデ		
5号住居跡	7-31	弥生土器・壺 口縁部	①(1.2)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
6号住居跡	7-32	弥生土器・壺 口縁部	①(1.3)	外・にぶい褐色 内・にぶい褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
6号住居跡	7-33	弥生土器・壺 口縁～頸部中位	①(4.7)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:不明 内:ヨコナデ		
1号石棺墓	11-34	弥生土器・壺 口縁部	①(3.6)	外・にぶい褐色 内・にぶい褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ・タテハケ 内:ヨコナデ/ヨコナデ		
1号石棺墓	11-35	弥生土器・壺? 口縁部	①(1.8)	外・浅黄褐色 内・浅黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		

出土遺構	押印番号	構種 (残存状況)	法量 (m) ① 高さ ② 口径 ③ 底径 ④ その他	色調・胎土・焼成			成形・調整・技法			備考
				色調 外・外内 内・内内	胎土	焼成	外・外内 内・内内			
1号石棺墓	11-36	弥生土器?不明 取手部	①(4.3)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ナテ 内・ナテ			
1号塚墓	11-37	弥生土器・甕 口縁部	①83.2 ②50.8 ③12.4 ④本体部径71.6	外・明灰褐色 内・明灰褐色	3mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・タテハケ/タテハケ 内・ヨコナテ/ヨコナテ・ナテ		丹波	
1号塚墓	11-38	弥生土器・甕 口縁部	①(3.4)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ/ナテ 内・ヨコナテ/ヨコナテ			
1号塚墓	11-39	弥生土器・甕 口縁部	①(1.8)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ 内・ヨコナテ			
1号塚墓	11-40	弥生土器・甕 口縁部	①(1.4)	外・灰黄褐色 内・灰黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外・ヨコナテ 内・ヨコナテ			
1号塚墓	11-41	弥生土器・甕 口縁部	①(1.5)	外・にぶい黄褐色 内・明褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ/不明 内・ヨコナテ/ヨコナテ			
1号塚墓	11-42	弥生土器・甕 口縁部	①(2.3)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石・褐色砂粒少量	良好	外・不明 内・ヨコナテ			
1号塚墓	11-43	弥生土器・甕 口縁部	①(1.2)	外・明黄褐色 内・明黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・不明 内・不明			
1号塚墓	11-44	弥生土器・甕 口縁部	①(1.6)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ/タテハケ? 内・ヨコナテ			
1号塚墓	11-45	弥生土器・甕 口縁部	①(2.0)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ 内・不明			
1号塚墓	11-46	弥生土器・甕 体部上位	①(3.1)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外・ヨコナテ/タテハケ 内・ヨコナテ			
1号塚墓	11-47	弥生土器・甕 体部上位	①(4.6)	外・褐色 内・にぶい黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ 内・不明		丹波	
1号塚墓	11-48	弥生土器・甕 底部	①(7.7) ③(9.6)	外・褐色 内・灰黄褐色	4mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・タテハケ・ナテ/回転ナテ 内・不明			
1号塚墓	11-49	弥生土器・甕 底部	①(3.8) ③(8.8)	外・明黄褐色 内・-	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外・タテハケ・ナテ/回転ナテ 内・-			
1号塚墓	11-50	弥生土器・甕? 口縁部	①(4.7)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・へらミガキ? 内・ヨコナテ			
1号塚墓	11-51	弥生土器・甕? 口縁部	①(1.5)	外・明黄褐色 内・明黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・不明 内・不明/ヨコナテ			
1号塚墓	11-52	弥生土器・甕 底部	①(4.3)	外・黒褐色 内・にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・へらミガキ?/不明 内・ナテ?			
1号塚墓	11-53	弥生土器・甕台 体部下位~底部	①(6.4)	外・褐色 内・褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・タテハケ 内・ナテ・ヨコナテ			
1号土坑	13-54	弥生土器・甕 口縁部	①(2.0)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・褐色砂粒少量	良好	外・ヨコナテ 内・ヨコナテ			
1号土坑	13-55	弥生土器・甕 口縁部	①(1.0)	外・浅黄褐色 内・浅黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ 内・不明		丹波	
1号土坑	13-56	弥生土器・甕 口縁部	①(3.2)	外・褐色 内・にぶい黄色	2mm以下の石英・長石 少量	良好	外・ヨコナテ 内・へらミガキ			
2号土坑	13-57	弥生土器・高坏 口縁~坏部中位	①(4.1)	外・褐色 内・褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・不明 内・ヨコナテ・へらミガキ			
3号土坑	13-58	弥生土器・甕 口縁~底部	①(22.5) ②(17.8) ③6.0 ④本体径(17.0)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ/タテハケ/ナテ 内・ヨコナテ/ナテ/ナテ			
3号土坑	13-59	弥生土器・甕 口縁部	①(2.0)	外・にぶい褐色 内・にぶい褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ 内・ヨコナテ			
3号土坑	13-60	弥生土器・甕 口縁部	①(1.8)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外・ヨコナテ 内・ヨコナテ			
3号土坑	13-61	弥生土器・甕 口縁部	①(1.8)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ 内・ヨコナテ			
3号土坑	13-62	弥生土器・甕 口縁部	①(3.3)	外・灰黄褐色 内・黄灰色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・不明 内・不明			
3号土坑	13-63	弥生土器・甕 口縁部	①(1.8)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ 内・ヨコナテ			
3号土坑	13-64	弥生土器・甕 底部	①(4.2) ③6.6	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・タテハケ・ヨコナテ/ナテ 内・不明			
3号土坑	13-65	弥生土器・甕 底部	①(5.9) ③(7.6)	外・褐色 内・灰黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・タテハケ・ナテ/回転ナテ 内・不明			
3号土坑	13-66	弥生土器・甕台 体部下位	①(6.7) ④体部径(6.5)	外・灰黄褐色 内・灰黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・タテハケ 内・不明			
3号土坑	13-67	弥生土器・甕 底部	①(2.8) ③(6.0)	外・にぶい褐色 内・にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・タテハケ/ナテ? 内・ナテ?			
3号土坑	13-68	弥生土器・甕 底部	①(2.9) ③(6.6)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・へらミガキ/ナテ? 内・ナテ			
3号土坑	13-69	弥生土器・甕 口縁~胴部上位	①(4.2) ②(34.0)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ・ナテ 内・ヨコナテ・ナテ			
5号土坑	13-70	弥生土器・甕 底部	①(7.5) ③7.8	外・褐色 内・にぶい黄褐色	4mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・タテハケ・ナテ/回転ナテ 内・ナテ?			

出土遺構	押印 番号	遺構 (保存状況)	法層 (m)			色調・胎土・焼成			成形・調整・技法		備考
			①器高 ②口径 ③底径 ④その他	色調 外・外面 内・内面	胎土	焼成	外・外面 内・内面				
6号土坑	13-71	土師器?甕? 口縁~体部下位	①(7.1)	外: 内ぶい黄褐色 内: 内ぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: ヨコナテ/ハケ 内: ヨコナテ/ヨコハケ				
6号土坑	13-72	弥生土器・壺 口縁~胴部上位	①(3.3)	外: 浅黄褐色 内: 浅黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外: ヨコナテ 内: ヨコナテ	丹塗			
7号土坑	13-73	弥生土器・壺 口縁~体部上位	①(9.2) ②(35.8)	外: 灰黄褐色 内: 灰黄褐色	5mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: ヨコナテ/タテハケ 内: ヨコナテ/ヘラミガキ				
7号土坑	13-74	弥生土器・壺 口縁~体部上位	①(5.3) ②(23.6)	外: 黒色 内: 黒色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: ヨコナテ/タテハケ 内: ヨコナテ/ヘラミガキ?				
7号土坑	13-75	弥生土器・壺 ほぼ完形	①(9.7) ②(10.2) ③(4.7)	外: 暗灰黄色 内: 暗灰黄色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: タテハケ/ミガキ/ナテ? 内: ナテ				
7号土坑	13-76	弥生土器・壺 底部	①(8.3) ③(8.6)	外: 内ぶい黄褐色 内: 灰黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: タテハケ/ナテ/回転ナテ 内: 不明				
7号土坑	13-77	弥生土器・壺? 底部	①(3.6) ③(7.6)	外: 明黄褐色 内: 暗灰黄色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: 不明/回転ナテ 内: 不明				
7号土坑	13-78	弥生土器・壺 口縁部	①(2.4) ②(20.0)	外: 内ぶい黄褐色 内: 褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: タテハケ/ヨコナテ 内: ヨコナテ?				
7号土坑	13-79	弥生土器・壺 底部	①(7.1) ③(9.3)	外: 内ぶい褐色 内: 灰黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: タテハケ/ミガキ/ナテ 内: 不明				
1号集石 遺構	15-80	弥生土器・壺 口縁~体部上位	①(6.3) ②(22.2)	外: 内ぶい黄褐色 内: 内ぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: ヨコナテ/タテハケ 内: ヨコナテ/ヨコナテ				
1号集石 遺構	15-81	弥生土器・壺 口縁部	①(3.3) ②(24.5)	外: 内ぶい黄褐色 内: 内ぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: ヨコナテ/タテハケ 内: ヨコナテ/ヨコナテ				
1号集石 遺構	15-82	弥生土器・壺 底部	①(7.0) ③(7.7)	外: 明黄褐色 内: 灰黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外: タテハケ/ナテ/回転ナテ 内: 不明				
1号集石 遺構	15-83	弥生土器・壺 底部	①(3.5) ③(7.4)	外: 明黄褐色 内: 灰黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外: タテハケ/不明 内: 不明				
1号集石 遺構	15-84	弥生土器・壺 口縁~胴部上位	①(11.5) ②(18.6)	外: 明褐色 内: 明褐色	3mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: タテハケ/ナテ?/ミガキ 内: ミガキ/ミガキ				
1号集石 遺構	15-85	弥生土器・甕台 口縁~体部上位	①(5.5)	外: 褐色 内: 内ぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: タテハケ 内: ヨコナテ				
1号集石 遺構	15-86	土師器?甕? 口縁~体部上位	①(6.7)	外: 内ぶい黄褐色 内: 内ぶい黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外: ヨコナテ/ヨコハケ 内: ヨコナテ/ヨコハケ				
1号集石 遺構	15-87	土師器・甕 取手部	①(7.2)	外: 黒褐色 内: 黒褐色	3mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母中量	良好	外: ハケ/ナテ 内: ヘラミガキ				
1号集石 遺構	15-88	土師器・甕 口縁~底部	①(30.2) ②(26.0) ③(10.4)	外: 内ぶい褐色 内: 内ぶい褐色	3mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外: ヨコナテ/タテハケ 内: ヨコナテ/ハケ	裾擦孔			
1号集石 遺構	15-89	浪速器・坏蓋 天井部・口縁部	①(4.3) ②(15.6)	外: 灰色 内: 灰色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石微量	良好	外: 回転ヘラズリ/ヨコナテ 内: ヨコナテ?				
1号集石 遺構	15-90	浪速器・坏蓋 体部中位・口縁	①(3.1) ②(15.8)	外: 灰色 内: 灰色	3mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: 回転ヘラズリ/ヨコナテ 内: ヨコナテ/ヨコナテ				
1号集石 遺構	15-91	浪速器・坏身 口縁~底部	①(4.4) ②(12.3) ④受部径14.6	外: 灰黄色 内: 灰黄色	6mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: ヨコナテ/回転ヘラズリ 内: ヨコナテ/ヨコナテ				
1号集石 遺構	15-92	浪速器・坏身 口縁~体部上位	①(1.9)	外: 灰黄色 内: 灰黄色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: ヨコナテ 内: ヨコナテ				
1号集石 遺構	15-93	浪速器・甕? 口縁部	①(4.0)	外: 黄灰色 内: 黄灰色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: タテハケ/ヨコナテ 内: ヨコナテ				
1号集石 遺構	15-94	浪速器・甕? 口縁部	①(4.7) ②(12.3)	外: 灰黄色 内: 灰黄色	6mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: ヨコナテ 内: ヨコナテ				
1号集石 遺構	15-95	浪速器・埴瓶 胴部~体部上位	①(8.9)	外: 灰色 内: 灰色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: ヨコナテ/ハケ 内: ヨコナテ/ヨコナテ				
1号柱穴	16-96	縄文土器?浅鉢? 体部中位	①(2.8)	外: 明黄褐色 内: 黒褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: ヘラミガキ 内: ヘラミガキ				
2号溝	16-97	弥生土器・壺 口縁~体部上位	①(6.4)	外: 内ぶい褐色 内: 内ぶい褐色	2mm以下の石英・長石 少量	良好	外: ヨコナテ/ヨコハケ 内: ミガキ/ミガキ				
1号溝	16-98	弥生土器・壺 口縁部	①(2.3)	外: 内ぶい褐色 内: 内ぶい褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: ヨコナテ 内: ヨコナテ?				
4号溝	16-99	弥生土器・壺 口縁~体部上位	①(4.3)	外: 褐色 内: 内ぶい褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: ヨコナテ 内: ヨコナテ				
3号ピット	16-100	弥生土器・壺 口縁部	①(1.9)	外: 黒褐色 内: 浅黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外: ヨコナテ 内: ヨコナテ				
11号ピット	16-101	弥生土器・壺 口縁部	①(1.6)	外: 内ぶい黄褐色 内: 内ぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・褐色砂粒少量	良好	外: ヨコナテ 内: ヨコナテ				
13号ピット	16-102	弥生土器・壺 口縁部	①(3.2)	外: 明黄褐色 内: 明黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外: ヨコナテ 内: ヨコハケ/ナテ				
16号ピット	16-103	弥生土器・高坪 坏部下位~胴部	①(14.9)	外: 褐色 内: 褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外: ヘラミガキ?/ヘラミガキ? 内: ヘラミガキ?/ナテ?				
18号ピット	16-104	弥生土器・壺 口縁部	①(1.4)	外: 内ぶい褐色 内: 内ぶい褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: ヨコナテ 内: ヨコナテ				
25号ピット	16-105	弥生土器・壺 口縁部	①(1.3)	外: 内ぶい黄褐色 内: 灰黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外: ヨコナテ 内: ヨコハケ?				

出土遺構	押印番号	遺構 (残存状況)	法量 (m)			色調・胎土・焼成			成形・調整・技法			備考
			①器高 ②口径 ③底径 ④その他	色調 外・外面 内・内面	胎土	焼成	外・外面 内・内面					
104号ピット	16-106	弥生土器・壺 底部	①(8.0) ②(7.2)	外・褐色 内・褐色	2m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・タテハ/ナテ/不明 内・ヘラミガキ					
109号ピット	16-107	弥生土器・壺 口縁～体部上位	①(5.7)	外・明赤褐色 内・明赤褐色	1m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ/タテハ 内・ヘラミガキ?					
203号ピット	16-108	瓦器・甕 口縁部	①(2.1)	外・褐色 内・灰白色	1m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・不明 内・不明					
クロボク壺	17-109	弥生土器・壺 口縁～体部上位	①(8.2) ②(8.2)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい褐色	3m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ/タテハ 内・ヨコナテ/不明					
クロボク壺	17-110	弥生土器・壺 口縁～体部上位	①(6.8) ②(26.0)	外・にぶい褐色 内・にぶい褐色	2m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・不明/タテハ 内・ヨコナテ/不明					
クロボク壺	17-111	弥生土器・壺 口縁～体部中位	①(4.5) ②(30.0)	外・にぶい黄褐色 内・褐色	1m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ/タテハ 内・ヨコナテ/ナテ					
クロボク壺	17-112	弥生土器・壺 口縁～体部上位	①(8.3) ②(36.2)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	2m以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外・ヨコナテ/ヨコナテ 内・ヨコナテ/ナテ					
クロボク壺	17-113	弥生土器・壺 口縁～体部下位	①(22.0) ②(25.3) ④体部径22.1	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	2m以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外・ヨコナテ/タテハ 内・ヨコナテ/ナテ					
クロボク壺	17-114	弥生土器・壺 口縁～体部上位	①(8.5)	外・暗灰黄色 内・にぶい褐色	1m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ/タテハ 内・ヨコナテ/ヘラミガキ?					
クロボク壺	17-115	弥生土器・壺 口縁部	①(5.0)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	2m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ/ヨコナテ 内・ヨコナテ/ヨコナテ					
クロボク壺	17-116	弥生土器・壺 底部	①(9.1) ③7.8	外・にぶい褐色 内・にぶい黄褐色	3m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・タテハ/回転ナテ 内・ナテ?					
クロボク壺	17-117	弥生土器・壺 底部	①(7.2) ③7.9	外・明黄褐色 内・にぶい黄褐色	2m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ/ナテ 内・不明					
クロボク壺	17-118	弥生土器・壺 底部	①(4.3) ③7.8	内・ 内・ 内・	2m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・タテハ/ナテ/回転ナテ 内・ 内・					
クロボク壺	17-119	弥生土器?壺? 体部下位～底部	①(11.9) ③13.8	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	3m以下の石英・長石・ 角閃石少量	やや不良	外・タテハ/タテハ 内・タテハ/タテハ/ヨコナテ					
クロボク壺	17-120	弥生土器?鉢? 口縁部	①(3.3)	外・にぶい黄褐色 内・褐色	1m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ/ナテ 内・ヨコナテ/ヨコナテ					
クロボク壺	17-121	弥生土器・壺 口縁～頸部上位	①(5.8)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	3m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ/ナテ? 内・ヨコナテ/ヨコナテ					
クロボク壺	17-122	弥生土器・壺 口縁部	①(2.2)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	1m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ 内・ヨコナテ			丹塗?		
クロボク壺	17-123	弥生土器・壺 口縁部	①(1.7)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	2m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ 内・不明/ヨコナテ					
クロボク壺	17-124	弥生土器・壺 体部上位	①(3.5)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	1m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ナテ? 内・ナテ?			二枚貝施文		
クロボク壺	17-125	弥生土器・壺 胴部下位	①(3.9)	外・褐色 内・褐色	2m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・タテハ/ナテ 内・ヨコハ					
クロボク壺	17-126	弥生土器・壺 底部	①(5.3) ③11.6	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	2m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・タテハ/ナテ? 内・ナテ					
クロボク壺	17-127	弥生土器・蓋 天井～体部中位	①(6.7) ④つまみ部径5.5	外・明黄褐色 内・明黄褐色	1m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・不明/ヨコナテ/タテハ 内・ナテ					
クロボク壺	17-128	弥生土器・蓋 天井部	①(4.4) ④つまみ部径(5.5)	外・黄褐色 内・黄褐色	2m以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外・回転ナテ/タテハ 内・ナテ?					
クロボク壺	17-129	弥生土器・蓋 体部中位～口縁	①(4.4)	外・褐色 内・褐色	1m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・タテハ/ナテ 内・ナテ?					
クロボク壺	17-130	土師器・壺 口縁～体部中位	①(18.4) ②(19.3) ④体部径(25.0)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	4m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ/タテハ 内・ヨコナテ/ヘラケズリ					
クロボク壺	17-131	弥生土器・高坏 脚部上位～中位	①(10.2)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	4m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・タテハ 内・ナテ			丹塗?		
クロボク壺	17-132	弥生土器・高坏 脚部上位～中位	①(9.4)	外・褐色 内・褐色	2m以下の石英・長石・ 角閃石・褐色砂粒少量	良好	外・タテハ 内・不明					
クロボク壺	17-133	弥生土器・高坏? 脚部上位～中位	①(10.8)	外・にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	2m以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外・不明 内・ナテ?					
クロボク壺	17-134	土師器・蓋 体部中位～口縁	①(3.6)	外・にぶい褐色 内・にぶい黄褐色	2m以下の石英・長石・ 褐色砂粒少量	良好	外・回転ヘラケズリ/ヨコナテ 内・ヨコナテ					
クロボク壺	17-135	須恵器・蓋 体部下位～口縁	①(3.0)	外・灰色 内・灰色	3m以下の石英・長石 少量	良好	外・ヨコナテ 内・ヨコナテ					
クロボク壺	17-136	須恵器・坯身 口縁～底部	①(4.1) ②(12.8) ④受部径(15.1)	外・黄灰色 内・黄灰色	1m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ/回転ヘラケズリ 内・ヨコナテ/ヨコナテ					
クロボク壺	17-137	須恵器・皿 底部	①(1.4) ③(16.0)	外・黄灰色 内・黄灰色	1m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ナテ/回転ヘラケズリ 内・ナテ					
クロボク壺	17-138	須恵器・坏? 底部	①(1.6)	外・灰色 内・灰色	1m以下の石英・長石 少量	良好	外・ナテ/ヘラケズリ 内・ナテ					
クロボク壺	17-139	土師器・甕 底部	①(1.9)	外・浅黄褐色 内・浅黄褐色	1m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ/ヨコナテ 内・不明					
クロボク壺	17-140	土師器・坏 口縁～底部	①(3.1) ②(11.6) ③(7.2)	外・褐色 内・褐色	1m以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外・ヨコナテ/不明 内・ヨコナテ/ヨコナテ					

出土遺構	押記番号	器種 (残存状況)	法量 (cm)			色調・胎土・焼成			成形・調整・技法		備考
			①高さ ④その他	②口径	③底径	色調 外:外面 内:内面	胎土	焼成	外:外面 内:内面		
クロボク壺	17-141	瓦器・埴 体部下位～底部	①(3.0) ③(5.5)			外:灰黄色 内:灰黄色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ナデ・ズリ/ヨコナデ 内:ヘラミガキ		
クロボク壺	17-142	瓦器?7 口縁～体部中位	①(4.3)			外:淡黄褐色 内:淡黄色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:不明 内:不明		
クロボク壺	17-143	土師器・甕 底部	①(1.7) ③(6.4)			外:淡黄褐色 内:淡黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ナデ/回転ヘラズリ 内:ヘラミガキ		
クロボク壺	17-144	瓦器・甕鉢 口縁～体部上位	①(5.2)			外:灰色 内:灰色	1mm以下の石英・長石 少量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
確認調査	18-145	弥生土器・甕 口縁～体部中位	①(10.1) ②(25.2)			外:淡黄褐色 内:淡黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ/タテハケ 内:ヨコナデ/ナデ		
確認調査	18-146	弥生土器・甕 口縁～体部中位	①(12.9) ②(29.0) ④体部径(24.5)			外:褐色 内:明褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ/不明 内:ヨコナデ/不明		
確認調査	18-147	弥生土器・甕 口縁～体部中位	①(4.8) ②(28.8)			外:淡黄褐色 内:淡黄褐色	3mm以下の石英・長石・ 角閃石・褐色砂粒少量	良好	外:ヨコナデ/ヨコナデ 内:ヨコナデ/不明		
確認調査	18-148	弥生土器・甕 体部下位～底部	①(9.6) ③7.2			外:明黄褐色 内:にじい黄褐色	5mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:タテハケ/ナデ/回転ナデ 内:不明		
確認調査	18-149	弥生土器・甕 底部	①(6.8) ③8.2			外:褐色 内:にじい黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:タテハケ/回転ナデ 内:ヘラミガキ		
確認調査	18-150	弥生土器・甕台 体部中位	①(9.7) ④体部径(6.1)			外:褐色 内:褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:タテハケ 内:ヨコナデ		
確認調査	18-151	弥生土器・甕 口縁部	①(4.7)			外:にじい褐色 内:褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ/ヘラミガキ	短文?	
確認調査	18-152	弥生土器・甕 口縁～頸部	①(5.1)			外:淡黄褐色 内:淡黄褐色	3mm以下の石英・長石・ 角閃石・褐色砂粒少量	良好	外:ヨコナデ/ヘラミガキ? 内:ヨコナデ		

第2表 出土土製品・石製品等観察表

出土遺構	押記番号	器種 (残存状況)	法量 (cm)			材質	色調	特徴・製作術・使用痕	備考
			①長さ ④その他	②幅	③厚さ				
1号住居跡	5-201	石彫丁	①(3.3) ②(3.1) ③(0.45)			粘板岩?	暗赤紫色	外周刃半月形、欠損、重量4.8g	
1号住居跡	5-202	フレイク	①2.1 ②2.0 ③1.0			姫島産黒曜石	暗灰色	重量2.1g	
1号住居跡	5-203	フレイク	①2.1 ②1.9 ③0.6			姫島産黒曜石	灰色	重量2.4g	
2号住居跡	5-204	礫石	①5.8 ②5.3 ③4.1			安山岩?	暗灰褐色	重量160.9g、部分的に被蝕?	
2号住居跡	5-205	礫石	①8.2 ②7.5 ③6.8			花崗岩?	暗灰色	重量572.9g、上面に使用痕	
1号石棺墓	11-206	刀子	①11.0 ②1.1 ③0.2 ④刃部長6.5			鉄製		ほぼ完形、錆が強い	
1号壘壕墓	11-207	フレイク	①5.1 ②2.6 ③0.9			姫島産黒曜石	灰色	重量0.7g	
1号壘壕墓	11-208	フレイク	①1.3 ②1.8 ③0.6			姫島産黒曜石	暗灰色	重量1.2g	
34号ピット	16-209	礫石	①12.4 ②10.3 ③7.3			安山岩?	灰色	重量1236.0g、周縁部に使用痕	
クロボク壺	18-210	平瓦	①(3.9) ②(7.0) ③(1.2)			1mm以下の石英・長石・角 閃石・褐色砂粒少量	茶褐色	上面に布目痕	
クロボク壺	18-211	土埴	①(5.4) ②1.9			1mm以下の石英・長石・角 閃石・褐色砂粒少量	明灰褐色	棒状、重量15.0g	
クロボク壺	18-212	不明石製品	①3.6 ③0.6			滑石	灰緑色	重量7.2g、紡錘車の転用品	
クロボク壺	18-213	投擲?	①5.6 ②4.8 ③4.5			安山岩	暗灰色	重量156.4g	
クロボク壺	18-214	投擲?	①4.6 ②3.3 ③3.3			安山岩	暗灰褐色	重量64.9g	
クロボク壺	18-215	礫石	①7.7 ②7.2 ③6.2			花崗岩?	橙灰色	重量487.1g、周縁部に使用痕	
クロボク壺	18-216	礫石	①(4.6) ②7.6 ③(3.4)			花崗岩?	橙灰色	重量174.5g、周縁部に使用痕	
クロボク壺	18-217	打製石礫	①2.1 ②1.8 ③0.4			姫島産黒曜石	灰色	重量0.9g	
クロボク壺	18-218	打製石礫	①1.8 ②1.7 ③0.5			姫島産黒曜石	灰色	重量1.1g	
クロボク壺	18-219	フレイク	①2.3 ②1.4 ③0.5			姫島産黒曜石	灰色	重量1.3g	
クロボク壺	18-220	フレイク	①4.6 ②2.3 ③1.4			姫島産黒曜石	暗灰色	重量14.5g	

## 第4章 調査のまとめ

今回の三口遺跡5次調査地周辺では、第2章でも述べたとおりこれまでも何度か発掘調査が実施されている。上万田遺跡では弥生時代後期から古墳時代にかけての集落と墓地に関わる遺構が確認され、三口遺跡1993年度調査区では6世紀代から8世紀代の集落が調査され、広畑地区でも9世紀前後の遺構が検出されている。また、7世紀末に建立されたと考えられる相原廃寺や大宰府へと延びる古代の官道も近接している。今回の調査でもこれらの過去の調査と類似した遺構や遺物が発見されたが、以下で時代ごとの内容を概観して、本書のまとめとする。

### 弥生時代中期

この時期は集落に関連する遺構が確認された。周壁や柱穴の配置が円形ないしやや楕円形の平面形をなすと考えられる竪穴住居跡として、2号・5号竪穴住居跡の2軒がある。2号は周壁の一部が検出されただけで柱穴が確認できなかったため、床面の規模が確定できないが、直径3.5m程度の小規模なものである。5号は2号と切り合う位置にあり、周壁が確認できなかったが柱穴の配置は長径で4.7mであることから、床面の直径は6.5m前後をはかるやや大型の住居跡と推定される。

今回の調査で出土した遺物を見ると、クロボク層中を含めてこの時期の土器が最も多量にあり、調査区外の広範囲に多数の竪穴住居跡が建築されていたと考えられる。これらの住居跡からなる集落が営まれた時期は弥生時代中期の前葉から中葉の時期が中心であるが、84の頸部上位に沈線めぐらす壺や124の体部上位に二枚貝による羽状文かと考えられる文様を施す壺などは前期後葉にさかのぼる土器である。

### 弥生時代後期

今回の調査で最も注目すべき成果が得られたのがこの時期の埋葬施設である。先述したとおり弥生時代後期から古墳時代初頭の時期の墓地が、近接する上万田遺跡で発見され、甕棺墓・石棺墓が合計10基ほど確認されている。今回の調査では石棺墓と甕棺墓が1基ずつ検出され、棺の大きさからみても小児用の墓と考えられる。当地域周辺の弥生時代の墓地は集落から離れた丘陵地などに設定されることが一般的であるが、行橋市下稗田遺跡では小児用の埋葬施設に限り、一部が例外的に集落内に営まれている。今回の石棺墓・甕棺墓が集落内に位置するものか、集落外の集団墓地に属するものかは、限定された小範囲の調査であったため不明であるが、クロボク層中からはこの時期の土器も出土している。

つぎに石棺墓・甕棺墓の特徴と位置付けを個別に検討する。まず、石棺墓は床面の長さが75cmしかないことから被葬者は乳幼児と考えられる。また、棺外ではあるが鉄製の刀子が副葬されていた。さらに、石棺を構成する石材は安山岩系の大型の板石を主体とするが、一部に花崗岩を使用しており、内外面の前面に赤色顔料を塗布している。これらの石材の産地のうち安山岩系のは不明であるが、花崗岩は山国川を挟んで西方約1kmの上毛町唐原地区の台地で同様の石材がみられる。一種類の石材で統一するのではなく、あえて異なる種類の石材を遠方から1枚だけ取り寄せて使用した意味は、被葬者の両親を中心とした親族の出自を反映する資料と考えることもできる。これらのことを勘案すると、石棺墓の被葬者は集落内の首長層等の有力な家系に属し、その家系は山国側東岸の当遺跡周辺を拠点とする集落にありながら、山国川西岸に展開する集団との深い交流があったものと考えられる。つぎに、甕棺墓は壺の器形の土器に安山岩系の板石で蓋をした単棺であ



るが、棺に使用した壺の器高が83.2cm、頸部の内径が26.9cmしかないことから、石棺墓と同様に乳幼児または小児を埋葬したものである。また、棺の壺及び蓋石ともに全面に丁寧に赤色顔料を塗布している。壺にはいくつかの特徴があるが、その最たる点が器形である。頸部と体部の境及び体部最大径部にめぐらされた断面台形の各2条の突帯は全体としてM字状を呈し、体部の器面調整にみられるハケ目などは瀬戸内海西部の周防灘沿岸に共通する点である。一方、口縁部は肥厚させて、外縁部に4条の凹線をめぐらしているが、これは瀬戸内海中部の吉備地方などにみられる特徴である。当地域周辺で口縁部に同様の特徴を有する甕棺は宇佐市中川遺跡などで若干の出土例がある。いずれにしてもこれらの特徴を有する甕棺はこの時期に瀬戸内海沿岸地方で人または土器の交流が進んでいたことを裏付ける特異な土器である。さらに、今回の甕棺の壺は口縁部に打ち欠きがあり、そのほぼ直下で体部下位の位置に穿孔がある。体部の穿孔は棺内の水抜きのための孔と考えられるが、口縁部の打ち欠きは墓壇に棺を埋納するときに孔が最下方になるようにするための目印の可能性もある。土器に対するこれらの加工作業は、口縁部の打ち欠いた断面にも赤色顔料が塗布されていることから、この壺が棺として使用されることが決定した後の行為であることは確実である。なお、この甕棺墓も棺自体は良好の土器で、墓壇も丁寧なつくりであることから、石棺墓同様に被葬者は有力な家系に属する者と考えられる。

甕棺墓の時期は土器の特徴から弥生時代後期の前半代と考えられるが、石棺墓も甕棺墓に隣接してほぼ同じ主軸方位を取ることから、同時期の遺構の可能性が高い。

#### 古墳時代後期

この時期の遺構としては、集落関係の遺構がある。方形に配置された4本柱の存在から、1号・3号・4号・6号竪穴住居跡がこの時期に該当すると考えられ、2号集石遺構も住居跡のカマドの一部かと推定される。

1号集石遺構も時期的には6世紀後半の遺構と考えられるが、その種別・用途は明確にはできなかった。ただし、出土した土器の組成や石の配列からみて、一つの可能性として横穴式石室の一部であることが想定される。

#### 古代以降

7世紀後半以降の確実な遺構は検出されなかったが、遺物では布目の圧痕を残す瓦片や瓦器が出土している。瓦片は近接する相原廃寺との関連が考えられる。

以上、今回の調査の内容を時期ごとにまとめてきたが、調査範囲が限定された小区画にならざるを得なかったことと、クロボク層中での遺構の検出ができなかったことなど、調査担当者の責に帰する反省点も多々あった。

最後になりましたが、今回の調査に際してご指導・ご教示をいただいた、小倉正五・佐藤良二郎・下條信行・田中裕介・平井典子・村上久和の皆様方には深甚より感謝を申し上げます。

#### 【参考文献】

- ・中津市教育委員会 『上万田遺跡発掘調査報告書』 中津市文化財調査報告書第1集 1972.3
- ・中津市教育委員会 『三口遺跡広域地区』 中津市文化財調査報告書第61集 2013.3.31
- ・行橋市教育委員会 『下神田遺跡』 行橋市文化財調査報告書第17集 1985.3.30

# 圖 版





(1) 三口遺跡5次調査前全景（南から）



(2) A区全景（北から）

図版 2



(1) A区北半 (南から)



(2) B区全景 (西から)



(3) C区全景 (南から)



(1) 1号竪穴住居跡  
(東から)



(2) 2号・3号・5号  
竪穴住居跡付近  
(北東から)



(3) 2号・3号竪穴住居跡 (西から)



(4) 2号竪穴住居跡遺物出土状況

図版 4



(1) 4号・5号竪穴住居跡  
(東から)



(2) 5号竪穴住居跡  
(北西から)



(3) 6号竪穴住居跡・1号  
石棺墓 (東から)



(1) 1号・2号柱穴列  
(西から)



(2) 1号・2号柱穴列  
3号土坑 (東から)



(3) 2号柱穴列 (北西から)



(4) 1号柱穴列 P 2・2号柱穴列 P 1



図版 6



(1) 1号石棺墓蓋石 (南から)



(2) 1号石棺墓蓋石開放状況 (南から)



(3) 1号石棺墓棺内清掃後 (南から)



(4) 1号石棺墓棺内清掃後 (東から)



(5) 1号石棺墓棺内 (真上から)



(6) 1号石棺墓刀子出土状況 (北から)



(7) 1号石棺墓北側壁 (南から)



(8) 1号石棺墓西側小口 (東から)



(1) 1号壙棺墓蓋石検出（北西から）



(2) 1号壙棺墓蓋石検出（北東から）



(3) 1号壙棺墓墓壇半裁（真上から）



(4) 1号壙棺墓墓壇断割り（南西から）



(5) 1号壙棺墓蓋石開放（北東から）



(6) 1号壙棺墓口縁部（南西から）



(7) 1号壙棺墓完掘後（北東から）



(8) 同墓壇堆積物



(9) 同墓壇掘削痕跡



(1) 1号土坑（東から）



(2) 2号土坑付近（南東から）



(3) 5号土坑（北から）



(4) 6号土坑（南から）



(5) 7号土坑・5号溝（南から）



(1) 1号集石遺構（西から）



(2) 1号集石遺構（東から）



(3) 1号集石遺構遺物出土状況（東から）



(4) 2号集石遺構（北西から）



(5) 2号集石遺構（北西から）



(1) 1号溝状遺構 (東から)



(2) 1号・2号溝状遺構 (北西から)



(3) 3号・4号溝状遺構 (北西から)



(4) 3号・4号溝状遺構 (南西から)



(5) 16号ピット





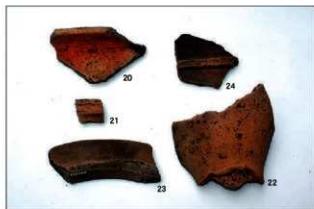
(1) 1号住居跡出土遺物 1



(2) 1号住居跡出土遺物 2



(3) 1号住居跡出土遺物 3



(4) 3号住居跡出土遺物



(5) 4号住居跡出土遺物



(6) 4号・5号住居跡出土遺物



(7) 1号石棺墓出土遺物 1



(8) 1号石棺墓出土遺物



(1) 1号壺棺



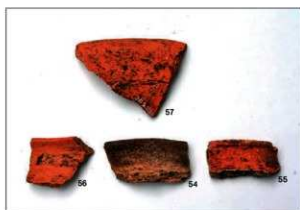
(2) 1号壺棺口縁部



(3) 1号壺棺体部下半



(1) 1号墓棺墓出土遗物



(2) 1号·2号土坑出土遗物



(3) 3号土坑出土遗物 1



(4) 3号土坑出土遗物 2



(5) 3号土坑出土遗物 3



(6) 5号~7号土坑出土遗物



(7) 7号土坑出土遗物



図版14



(1) 1号集石遺構出土遺物 1



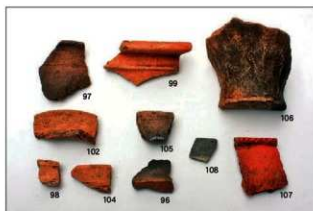
(2) 1号集石遺構出土遺物 2



(3) 1号集石遺構出土遺物 3



(4) 1号集石遺構出土遺物 4



(5) ビット等出土遺物 1



(6) ビット等出土遺物 2



(7) クロボク層出土遺物 1



(8) クロボク層出土遺物 2



(1) クロボク層出土遺物 3



(2) クロボク層出土遺物 4



(3) クロボク層出土遺物 5



(4) クロボク層出土遺物 6



(5) クロボク層出土遺物 7



(6) クロボク層出土遺物 8

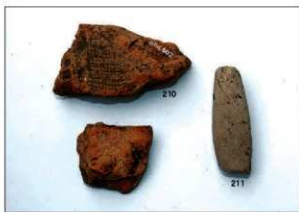


(7) クロボク層出土遺物 9



(8) クロボク層出土遺物10

図版16



(1) クロボク層出土遺物11



(2) 1号住居跡・1号墓竈出土遺物



(3) 1号住居跡・34号ピット出土遺物



(4) クロボク層出土遺物12



(5) クロボク層出土遺物13

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	みくちいせき じちようき							
書名	三口遺跡5次調査							
副書名	大分県中津市大字相原における店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	中津市文化財調査報告							
シリーズ番号	第85集							
編著者名	末永 弥義							
編集機関	中津市教育委員会							
所在地	〒871-8501 大分県中津市豊田町14番地3 TEL 0979-22-1111							
発行年月日	2018年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
三口遺跡	大分県中津市大字 相原3303番地	44203	203041	33°	131°	20170621	408	店舗建設
				34°	11°	~		
				08"	21"	20170810		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
三口遺跡	集落 墓地	弥生時代 ~古代	竪穴住居跡 柱穴列 埋葬施設 土坑 集石遺構	6軒 2条 2基 7基 2基	縄文土器・弥生土器 土師器・須恵器・瓦器 瓦・土錘・石器・刀子	なし		
要約	<ul style="list-style-type: none"> <li>弥生時代中期の集落跡、弥生時代後期の埋葬施設及び古墳時代後期の集落跡のそれぞれ一部が確認された。</li> <li>弥生時代後期の埋葬施設は小児用の石棺墓と甕棺墓が各1基である。石棺墓からは鉄製刀子が出土し、甕棺は副葬品の出土はないが、口縁部に瀬戸内系の特徴がみられた。</li> </ul>							



